永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2018年 5月

「恐れるな、小さい群れよ」「人の堕落(川)」「神の最後の憐れみのメッセージ」「かぼちゃプリン」



いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

 今月の聖書勉強
 人の堕落 (II)
 4

 聖書の教え
 恐れるな、小さい群れよ
 7

 現代の真理
 「神の憐れみの最後のメッセージ」
 39

 清めの特別な働き
 かぼちゃプリン
 46

 お話コーナー
 「エルサレム入城 (I)」
 48

 イエスの物語
 イエスの物語

【正丸教会】

〒 368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1 電話 : 0494-22-0465 FAX : 0494-40-1045

【高知集会所】

〒 780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2 電話: 088-831-9535

【沖縄集会所】

〒 905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21 電話: 0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

メール support@4angels.jp

発行日 2018年4月1日

編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション

〒 368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Images on Front page, Dreamtimes on Back page

恵みの王国一イエスの王権

「イエスは言われた、『よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう』。」(ルカ23:43)。

「ほかのすべての者の目には征服されたおかたに見えたイエスが征服者であった。主は罪を負うおかたとして認められた。……彼らは、イエスから罪をゆるす権利を奪うことはできない。……彼によって神に来る人々を、いつも救うことがイエスの王権である(ヘブル 7:25 参照)。」(各時代の希望下巻 271)

「恵みの王国は、人類の堕落後直ちに、罪を犯した人類の贖罪の計画がたてられた時に、設立された。それは、その時、神のみ心のうちに、そして神のお約束のもとに存在していた。そして、信仰によって、人々はその国民となることができた。しかしそれは、キリストが亡くなられるまでは、実際に築かれなかった。救い主は、地上の伝道開始後においても、人類の強情さと忘恩にうみ疲れて、カルバリーの犠牲を避けることも可能であった。ゲッセマネにおいて、苦悶の杯は、彼の手の中で震えた。彼は、そのときでも、額から血の汗をぬぐって、罪深い人類を、その罪悪のうちに滅びるままにしておくことがおできになった。もし彼がそうなさったならば、堕落した人類の贖罪はあり得なかったのである。しかし、救い主が、その生命をささげ、「すべてが終った」と叫んで息を引き取られた時、贖罪の計画の完成が確保された。……これまで神の約束によって存在していた恵みの王国が、この時、設立されたのである。」(各時代の大争闘下巻 40,41)

「イエスは天父の前で、人類の助け主となられる権利を獲得しようとしておられた。敵のために祈られたキリストの祈りは世界を包含していた。それは、世の始めから時の終わりまで、かつて生存し、これからも生存するすべての罪人を含んでいた。すべての者の上に神のみ子を十字架につけた罪がおかれている。すべての者にゆるしが豊かにさし出されている。望む者はだれでも、神とやわらぎ、永遠の生命を継ぐことができるのである。」(各時代の希望下巻 263)

「このように、わたしたちは震われない国を受けているのだから、感謝をしよう (恵みを得よう:英語訳)ではないか。そして感謝しつつ、恐れかしこみ、神に 喜ばれるように、仕えていこう」(ヘブル 12:28)。

聖書の教え-現代の直理-

第4課 人の堕落(II)

パラダイスを去る

禁じられた果実を食べた後、この夫婦は自分たちが裸であることに気づきました。「すると、ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた。」(創世記 3:7)。

そのとき初めて、彼らは自分たちの不服従の行為の結果を悟りました。無垢を失ったことを見て、恥ずかしさを感じた二人は、木の陰に隠れました。彼らは神に会うことを恐れました。罪が、その働きを始めたのでした。

「主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』。彼は答えた、『園の中であなたの歩まれる音を聞き、わたしは裸だったので、恐れて身を隠したのです』。」(創世記 3:9, 10)。

彼らのみじめな状態に気づかれた神は、彼らが裸であることをだれが教えたのかとお尋ねになりました。彼らが禁じられた木の実を食べるなどということがあり得るであろうか。アダムは、女に責任を負わせて、答えました。神が彼女にその理由をお尋ねになったとき、彼女は神が創造されたへびを責め、それによって、自分の罪を神ご自身へ押しつけることによって、自分の罪を転嫁しようとしました。

人の不法の知らせは、天を悲しみで満たしました。

彼らの不服従によって、罪が地上に入り、そして罪の結果として、死が続きま した。

「このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである。」(ローマ 5:12)。

「そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東にケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせた。」(創世記 3:23, 24)。

地は呪われた

罪の結果のゆえに、主は憐れみのうちに地の上にのろいをおかれました。神は次の宣告をなさいました。「更に人に言われた『あなたは妻の言葉を聞いて、食べるなと、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのために呪われ、あなたは一生苦しんで地から食物を取る。地はあなたがたのために、いばらとあざみを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。あなたは土から取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰る。」(創世記 3:17-19)。

アダムとエバは悲しみと落胆のうちに、彼らの美しい家庭から離れなければならなくなりました。彼らはいまやのろわれた地に住むために園から出ていきました。彼らは自責の念を強く感じましたが、すでに手遅れでした。彼らは、食物を得るために土を耕すという重労働をしなければなりませんでした。彼らは、花々がしぼみ、木の葉が枯れて地に落ちるのに気づきました。なんと悲しい光景でしょうか!以前の地球は美しく快適でしたが、今ではいばらやあざみ、毒のある植物が生じました。彼らは、神のご命令に対する不従順という自分たちの罪がこれら全てをもたらしたことを悟りました。これらのすべてのうちアダムにとって最もつらかったことは、自分自身の手によって罪のない小羊の血を流さなければならないことでした。これは、神がご計画をもっておられること、そしてこのお方が神と人類の間の回復に向けて働いておられるという保証を認めてなされるのでした。しかし、神がご自分のみ約束を果たされることを信じる彼らの信仰と信念の証拠として、血が流されなければなりませんでした。この犠牲は、彼らの回復のための唯一の条件を象徴していました。

その時以来、悲惨さ、苦悩、死が人の経験となりました。それらはすべて神のみ言葉を無視したためでした。しかし、今日においても、わたしたちが神の勧告を心にとめるならば、罪から生じる苦しみを軽減させることができます。

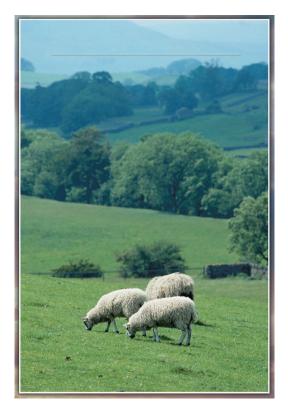
あがないの約束

神は愛情深く、憐れみ深いお方ですが、また正しい義なるお方です。神は、 人を許し、人の回復のために備えをしてくださいますが、人間は自分がまいた種 を刈り取らなければなりません。その罪を犯した二人はエデンから追放され、死 の支配下に入りました。もしアダムが罪の許しのための神の備え、すなわち血を 流すことを受け入れないのであれば、彼の運命は決定するのでした。しかし、彼 は身代わりの犠牲を受け入れ、罪のない小羊が殺され、血が流されました。そして神は、皮からアダムとエバを覆うために衣をお作りになりました。「主なる神は、人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた」(創世記 3:21)。

アダムの手によって殺された小羊と人のために備えられた皮の衣は、悔い改めた罪人のためのキリストの犠牲を象徴していました。救い主が来られるというみ約束がアダムとエバに与えられました。「わたしは恨みをおく、おまえと女との間に、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」(創世記 3:15)。このように、神は、最初の夫婦を希望のないままにはしておかれませんでした。彼らにはあがないの計画が提供されました。この同じあがないの計画はなおも、神がイエス・キリスト、すなわち、すべての悔い改めた罪人の救い主を通して罪からわたしたちを回復なさるために与えてこられた備えを受け入れる一人びとりに提供されています。聖書は、科学の中の科学、すなわち救いの計画を明らかにしている神の教科書なのです。

恐れるな、小さい群れよ

Fear Not, Little Flock



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく 小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立 つならば、神は彼らの逃れの場となって下さる。彼らは全能の神の広い 盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

5月

力ある鮮烈な模範

「過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。……夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰に巻き、それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた。」(ヨハネ 13:1, 4, 5)

まもなくキリストは、世のためにご自分を犠牲として捧げられるのであった。 弟子たちが主なるお方と共に過ごすこの最後の数時間に、サタンは彼らの間に争いを引き起こそうと固い決意の下に努力した。彼らが争いの精神に屈服し、だれが一番になるべきかと言って論争しているのをご覧になって、キリストの心は悲しみに満たされた。彼らが正しい心の状態にあったなら、大いなる祝福を受けたはずであった。しかし彼らは利己心に満たされた心と、争いに熱くなった気分で晩餐に来たのだった。

キリストは彼らのささやきをお聞きになり、彼らのほてった顔をご覧になった。一言もなく、このお方はご自分の上着を脱いで、手ぬぐいを腰に巻かれ、僕であるかのようにご自分の弟子たちの足を洗い始められた。このお方の行動は彼らの目を開いた。彼らは驚きと恥のあまり、ものを言うことができなかった。苦い恥と屈辱が彼らの心を満たした。彼らは自分たちを全く新しい光のうちに見たのであった。(原稿6巻24)

ご自分の弟子たちの足を洗うために手ぬぐいを腰に巻かれた行為そのものによって、イエスは彼らを鎮めて、疎遠、不和、ねたみ、そして誇りから清めようと望まれた。彼らのうちだれ一人として、そのような不幸な不一致の精神では、神の御前に受け入れられる状態になかった。新たにされ、あらゆる汚れから清められた心は、彼らのほこりっぽい足に外面的に水を用いることよりもはるかに重要なのであった。彼らがへりくだりと愛情という正しい状態にならない限り、イエスが彼らに与えたいと切に望んでおられた教訓を与えることがおできにならなかった。不和はいつも憎しみを生み出すが、キリストはご自分の弟子たちの足を洗う行為によってそれを洗い流されたのであった。感情の変化が起こった。互いに心と愛の一致が存在した。彼らは柔和で、教えを受けることができる、愛情に満ちた者となり、だれにでも最高位を譲るようになった。彼らは自分たちの主なるお方と、互いに対する深くて満ち満ちた愛のかぐわしい思いをもって、最後の晩餐にあずかる準備ができたのである。(レピュー・アンド・ヘラルド1898年7月5日)

いかに卑しい奉仕であろうとも

「ペテロはイエスに言った、わたしの足を決して洗わないで下さい。イエスは彼に答えられた、もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる。」(ヨハネ13:8)

この〔洗足の〕儀式の間、聖霊は弟子たちの心に感銘を与え、彼らが互いを扱うにあたって示した利己心を一掃していた。つい先ほどまで彼らのうちのある者は、自分の兄弟たちが最高位を求めたからといって感情を害していた。今や、これらすべてのことはあまりにも些細なことに思われ、一大事が取るに足らない小事となったので、論争は恥に代わった。「そこで、あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければならない」とキリストは宣言なさった(マタイ23:11)。奉仕する者は自らを低くし、そうすることによって主が彼に誉を与えても安全な場所におかれるようになるのである。(レピュー・アンド・ヘラルド1902年11月4日)この儀式の目的は、わたしたちの主の謙遜と、またこのお方がご自分の弟子たちの足を洗われることによってお与えになった教訓を思い起こさせることである。人のうちには自分を兄弟より高く評価し、自分のために働き、自分自身に仕え、最高位を求める性質がある。そして、しばしば些細なことをめぐって邪推と苦々しい精神とが生じるのである。主の晩餐に先立って、この儀式はこれらの誤解を取り除くため、また人を利己心から抜け出させて、自己高揚という竹馬から、自分の兄弟の足を洗うようにと導く謙遜な精神へと引き下げるためのものである。

洗足の行為のうちに自分の前につねにキリストの屈辱を見ているすべての者、また自分たちの心をつねにへりくだらせ、人ではなく主が張られた真の幕屋と儀式をつねに見続けているすべての者は、与えられた一つ一つの説教から益を受け損なうことも、また一つ一つの聖餐式から霊的な力を受け損じることも決してない。彼らには確固とした目的がある。キリストに従う者たちは、このお方の謙遜に示されたその模範を心に留めているべきである。この儀式はへりくだりを促すためであるが、人類の品位を落とすという意味においてへりくだるのだと言われてはならない。これは、わたしたちの心を互いに和らげるためである。神のみ霊の感化に心を開いて……来る者たちは、大いに祝福されるのである。(同上 1897年6月22日)

ご自分の弟子たちの足を洗われたお方は、天の大能者であられた。このお方はご自分の心の内に蓄えられた永遠の愛を持っておられたが、彼らの間では仕える者となられた。そして彼らの足を洗われることによって、彼らをご自分の天の宝のすべての永遠の富の共同相続人とするためには、ご自分はいかに卑しくても、どんな奉仕でもなさるという証拠を彼らに与えられたのである。(同上 1898 年 6 月 14 日)

古い儀式に取って代る新しい儀式

「『すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなのだから。あなたがたはきれいなのだ。しかし、みんながそうなのではない』。 イエスは自分を裏切る者を知っておられた。それで、『みんながきれいなのではない』 と言われたのである。」(ヨハネ 13:10, 11)

キリストはユダの心を知っておられたが、彼の足を洗われた。……わたしたちはある人が誤りと罪のうちにいると思うからといって、その人から自分たちを切り離し、彼とどのような交わりをも持つことを拒んで、自分たちの推測を第一とすべきではないことを理解しなければならない。キリストの模範はこのような結論を出す者をだれ一人として支持しない。兄弟の側でさらに努力することによって、救われることのできる魂が多くある。しかし、その人から無頓着に離れて、彼をサタンの誘惑にさらされるがままにしておき、悪魔の戦場に彼を追いやることは、キリストの方法ではない。このお方は滅ぼすことではなく、回復することを求められたのである。……

この単純な儀式が執り行われているとき、この時間はすべての者が自分の心を探り、霊のうちに自らを快くへりくだらせているかどうか、またキリストの模範に従うかどうかを調べる時であることを、キリストに従う者たちは心に留めるべきである。このお方はこの儀式をテストとして、また心を探るものとして彼らにお与えになる。聖霊は罪と兄弟になされた誤った行為を自覚させるためにすべての儀式に臨在なさるのである。……

主はこの謙遜な儀式がとり行われる際、そのすべてにご臨在なさる。このお方は見えざる証人であられる。このお方はすべての心を、その秘かな目的も不正行為も罪も共に読まれる。あなたは神の定められたこれらの時をなおざりにし、欠席することができるが、そのとき、あなたについてキリストのみ言葉が適切に語られることになる、「みんながきれいなのではない」(ヨハネ 13:11)。

この儀式においてキリストは、儀式と礼典における古代ユダヤ人の義務の苦労と重荷からご自分の弟子たちを解放された。……この儀式は人の知的能力よりもむしろ人の心に訴えるのである。彼の道徳的また霊的性質はこの儀式を必要としている。もしこのお方の弟子たちにこれが必要でなかったならば、それは最後の晩餐と関連してまたそれを含んだキリストの最後に制定された儀式として彼らに残されなかったはずである。ご自分の弟子たちに、彼らの必要そのものを彼らのためになす儀式を残されることが、キリストの願いであった。すなわち、それまで彼らが必須なものとして携わってきたが、福音を受け入れることによってもはや何の効力もなくなった儀式と礼典から彼らを解放する役目を果たすものを彼らに残すことを望まれたのである。これらの儀式と礼典を続けることは、エホバに対する侮辱となるのであった。(レピュー・アンド・ヘラルド1898年6月14日)

この儀式におけるさいわい

「しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。よくよくあなたがたに言っておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない。もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである。」(ヨハネ 13:14-17)

この〔洗足の〕儀式においてキリストは、ご自分の弟子たちを儀式と礼典における古代のユダヤ人の義務の苦労と重荷から解放された。これらにはもはや何の効力もなかった。なぜなら、キリストご自身のうちに型が本体に合おうとしていたからである。……このお方はこの単純な儀式を、いつもキリストご自身が臨在なさる時とし、それに参加するすべての者たちを導いて、自分たちの良心の鼓動を感じさせ、象徴に表されている教訓を理解するよう目覚めさせ、彼らの記憶をよみがえらせ、罪を自覚させ、そして悔いくずおれた彼らの悔い改めを受けいれるための特別な時になるようにとお授けになったのであった。このお方は自分の兄弟よりも自分を高めてはならないこと、また不和と争いの危険を悟り、また正しく認識することを彼らに教えたいと望まれた。なぜなら魂の健康と聖なる活動にかかわるからである。(レピュー・アンド・ヘラルド 1898 年 6 月 14 日)

何か一つでも大事にしている罪があるであろうか。それを告白によって魂から切り離そう。あなたがキリストに向ける悔恨と悔い改めの最初のまなざし、最初の行為で、このお方に気づかれないものはない。このお方に向かってあなたが踏み出す初めの一歩は、このお方を一歩以上あなたに近づけるのである。特別にこの機会に、すべてがあなたを受け入れるために準備されている。このお方はあなたを、その弱さと悔い改める心の砕けた魂のうちに、ご自分の神性の力をもって迎えられるのである。(同上)

互いの和解という働きのために、洗足の儀式が制定されたのである。わたしたちの主であり、主人であられるお方の模範によってこのへりくだりの儀式は聖なる儀式とされた。それが行われるところではどこでも、キリストがご自分の聖霊によって臨在されるのである。心に自覚をもたらすのはこのみ霊である。キリストがこの儀式をご自分の弟子たちと共に行われたとき、ユダを除いてすべての心に罪の自覚がもたらされた。そのようにわたしたちも、キリストがわたしたちの心に語られるとき、罪を自覚させられるのである。魂の泉が砕かれる。思いは活気づけられる。そして、行動と命へと躍動し、不和と疎遠を引き起こしていたすべての障壁をうち壊すのである。犯してきた罪は今までになくくっきりと浮かび上がる。なぜなら聖霊がそれらをわたしたちに思い出させるからである。「もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである」というキリストのみ言葉は、新しい力によって着せられるのである(ヨハネ13:17)。(同上1902年11月4日)

主の晩餐

「主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、そして言われた、これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい。食事ののち、杯をも同じようにして言われた、この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい。だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。」(コリント第一11:23-26)

人の救いは、キリストの清めの血を絶えず心に塗ることにかかっている。それゆえに、主の晩餐は毎年の過ぎ越しの祭り以上に、頻繁に守られるべきであった。この厳粛な儀式は、エジプトからイスラエルの子らが解放されたことよりも、はるかに大いなる出来事を記念している。その解放は、神の民の最終的な解放のためにキリストがご自分の命を犠牲にすることによってなされた大いなる贖罪の型であった。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1880 年 3 月 25 日)

わたしたちの主の食卓の周りに集まるとき、わたしたちは自分たちの欠点についてくよくよ考えたり嘆いたりすることを、自分たちの仕事とはしないのである。これらすべては洗足式の儀式に含まれている。……わたしたちは宗教生活における過去の経験が高揚させるものであろうと落胆させるものであろうと、それに思いがとらわれた状態で来ることはしない。わたしたちは自分の兄弟の手から受けたひどい仕打ちを思い起こすために来たりはしないのである。謙遜の儀式は、道徳的視野から、蓄積するがままに許されてきたがらくたを取り除くためのものである。今わたしたちはイエス・キリストにお会いするために、このお方と交わるために集まったのである。すべての心は、義の太陽の輝かしい光線に向かって開かれるべきである。わたしたちの思いと心は、永遠の命のわたしたちの望みがかかっている偉大な中心としてキリストに固定されるべきである。わたしたちは陰にではなく、十字架の救う光のうちに立つべきである。(レピュー・アンド・ヘラルド1897年6月22日)

洗足の儀式と主の晩餐は、その単純さと霊性のうちに、真の厳粛さと感謝に満たされた心をもって遵守されるべきである。……福音の働きに携わるために、また魂を罪から聖潔の上向きの道へと導くために、思いの活力と身体の健全さが新たにされるべきである。この儀式では、キリストのくびきを負うために、またこのお方との協力関係に入るために、すべての思い、すべての活力、すべての愛情と機能を有益に用いる必要があることが提示されているのである。(同上 1898年 6月 21日)

クリスチャンの信任状

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。」(ヨハネ 13:34, 35)

もし各自が、自分の心の中にキリストを締め出すどんな罪が潜んでいるかを探り調べるならば、即座に他の人々を自分より高く評価する働きを見出すであろう。彼はもはや自分の目にはりがあるのに、兄弟の目からちりを取ろうとはしないのである。

クリスチャンはだれ一人として、兄弟を訴える者として見出されることがないようにしよう。サタンこそこの肩書きを持っている者である。彼は昼も夜も神のみ前で彼らを訴え、わたしたちを訴えるようにとわたしたちの信仰の敵をかき立てるのである。そして彼は、同じ尊い信仰を持った者たちが互いに批判し非難するように刺激するのである。わたしたちは彼の働きに関係すべきではない。これらは、試みと大いなる危難の日であり、魂の敵はすべての者を追跡しているのである。そしてわたしたちは世からは離れている一方で、信仰と愛のうちに共に押し進むべきである。わたしたちは一致すれば強いが、分離すると弱いのである。

わたしたちは兄弟として愛し、親切で、礼儀正しく、寛容であるように、また進んで互に尊敬し合うように勧められている。神と互いへの愛は、神の子らが帯びている神聖な信任状を構成している。……この愛を抱く者たちは、互いの利益を神聖に守る。悪い噂は一つも伝わらず、おしゃべりと噂話は止み、キリストと真理が拡大される。

不平を言い、あら捜しをする性質をいだき続ける者はだれ一人として、天国に入ることはできない。なぜなら彼らはその平和と調和を台無しにするからである。彼らは紛争を引き起こす者たちと共に、神の都の外に置き去りにされる。また彼らは教会に留まり一致を妨げ、有用性を壊すことを許されるべきではない。彼らに譴責を受けさせなさい。そして、もし彼らが自分たちの方針を変えないなら、教会から離れさせなさい。しかしすべての者たちは、望みさえすれば、これらの悪い性質に打ち勝つことができる。教会員たちは調和して共に歩むことを自ら誓約すべきである。各自は自分の心に門守を置き、自分の兄弟たちを悪く考えることを許さず、彼らが持っているすべての良い資質に対して彼らを称えるべきである。わたしたちは思いに神のみ言葉の尊いみ約束と教訓を蓄えるべきである。サタンが何の益もないことに注意をそらそうとする時、そのときこそわたしたちはこれらの天来のみ約束について考え、語るべきである。そうすれば誘惑者は克服されるのである。(ヒストリカル・スケッチ・オブ・SDAミッション 213, 214)

慰めの言葉

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。 わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう 言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、 行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎 えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」(ヨハネ 14:1-3)

キリストは、ご自分が十字架に掛けられたときにご自分の弟子たちの信仰がなくならないように、できるかぎりの励ましの言葉はすべて語られた。もしキリストの十字架と埋葬の後に、弟子たちが悲しみにくれる代わりに、この時のために彼らを準備させようとキリストが語られた言葉を注意深く回想したならば、彼らはあそこまですっかり落胆することはなかったはずであった。彼らは暗闇の中に光を見たはずであった。(ユース・インストラクター 1898 年 7 月 21 日)

これらの最後の悲しみの時間、キリストは弟子たちにご自分の裁判の夜、彼らはみなご自分につまずき、ご自分をひとり置き去りにすると仰せになった。このお方は彼らにご自分の死後、少しの間悲しむが、彼らの悲しみは喜びに変わるということを話された。このお方は彼らが会堂から追い出され、彼らを殺す者たちは自分たちが神の働きをしていると考える時が来ることを話された。このお方はご自分がまだ彼らと共にいる間になぜこれらのことを話されるかをはっきり述べられた。それはこのお方のみ言葉が成就したとき、このお方が前もってそのことを彼らに話されたことを思い出すためであった。……このお方は率直にはっきり述べられた。それは、弟子たちが来るべき自分たちの試練において、いと高きお方は自分たちを忘れることも見捨てられることもなさらないことがわかるためであった。……

キリストの離別の目的は、弟子たちが恐れていたこととは反対であった。それはこのお方からの最終的な離別を意味していたのではなかった。このお方は彼らのために場所を用意しに行かれるのであり、それはご自分がまた来て彼らをご自分に迎え入れるためであった。

弟子たちのみならず、わたしたちにもこれらの慰めの言葉が語られたのである。この地上の歴史の最後の場面において、戦いは激しさを増すようになる。疫病、災い、飢饉が起こる。深淵の水が境界を越えてあふれ出る。財産と生命は、火事と洪水によって破壊される。わたしたちは、キリストがご自分を愛する者たちのために用意しに行かれたすまいのために用意しているべきである。そこには地上の争闘からの休みがある。それはどこであろうか。「わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」(ヨハネ14:3)。天国はキリストがおられるところである。キリストを愛する者にとっては、もし天国にキリストがおられなかったなら、そこは天国ではなくなるのである。わたしたちは個人個人、キリストと天の御使たちの社会にふさわしい品性を各々形成しているであろうか。(レビュー・アンド・ヘブルド1897年10月19日)

唯一の道

「イエスは……言われた、わたしは道であり、真理であり、命である。だれでも わたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。」(ヨハネ 14:6)

人々が神の道に従うか、あるいは自分たちの道に従うかによって、将来の永遠の安寧に決定的な相違が生ずる。彼らの道がまったく間違っていることもある。 天国への道は数多くあるのであろうか。もしそうであれば、人は自分の好みにあうどの道でも選ぶことができる。しかし、真の道は一つしかないのである。……

もしわたしたちが高められることに同意するならば、主はわたしたちを高めてくださる。キリストのうちに神を認める者、キリストを世の贖い主としてまた自分の個人的救い主として受け入れる者はその戸口から入るのである。彼は他の道をよじ登ったりはしない。(レピュー・アンド・ヘラルド 1897 年 3 月 16 日)

キリストに従うと公言している者たちは時々、「わたしが荒々しくても、また無 作法に話しても、短気を表したとしても驚かないでください。なぜなら、これが わたしのやり方(way:道)なのですから」と言う。しかし、わたしたちがイエ スのみかたちを反映することができるようにと、救いの計画が考案され、無限の 犠牲がカルバリーの十字架上で払われたのであるから、天はそのような表現に驚 くのではないだろうか。あなたの方法(way:道)は天へと導くだろうか。ある 人が真珠の門のところに来て、「わたしは自分が無作法で不親切だったことを知 っています。そして、うそをつき、盗むことがわたしの性質です。しかし、天の住 まいに入りたいのです」と言うとしよう。その方法(way:道)は彼を天の都の 門に入れさせるであろうか。否、そこに入るのはキリストの方法(wav:道)を 守る人々なのである。このお方は、「わたしは道であり、真理であり、命である。 だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」(ヨハネ 14:6) と言われる。もしだれでも自分がほかの道をよじ登ることができると思うとすれば、 それが栄光のすまいには続いていないことを発見するようになる。わたしたちはキ リストの道を望むのである。体に栄養を与える命が血であるように、このお方の 命がわたしたちのうちになければならない。(バイブル・エコー 1892 年 1 月 15 日)

わたしたちは宗派として救われるのではない。どの教派の名もわたしたちを神の恩寵のうちに入れる効力はない。わたしたちは各々、主イエス・キリストを信じる信者として救われるのである。……わたしたちの名は諸教会の中で最も霊的な教会の名簿に記録されているかもしれないが、なおわたしたちがキリストに属さず、またわたしたちの名が小羊の命の書に記されていないということもあり得るのである。キリストは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と言われた(ヨハネ 14:6)。もしわたしたちが自分たちの功績と努力によって天に達することができるなら、キリストは苦しみと非難と恥に耐えるために、また屈辱、嘲笑、侮辱、そして死を受けるために、この世に来られる必要はなかったのである。キリストは無限の犠牲を払われた。なぜならそれが、人が救われることのできる唯一の道であったからである。(レピュー・アンド・ヘラルド1891年2月10日)

上よりの力

「わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい。よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。」(ヨハネ 14:10-12)

キリストはご自分が御父のところへ行かれるからといって、弟子たちから力が奪われるのではないということを彼らが理解するように望まれた。このお方が彼らに約束されたことは、わたしたちのためである。もしわたしたちがそれを書いてある通りに受け入れるなら、わたしたちは神と真理に大きな確信と信頼をおくようになるので、神はわたしたちを通してご自分の力を表すことがおできになる。わたしたちの良い行いによって、自分たちの信仰を示すのである。わたしたちは神の働きをなすことを可能にする力と恵みを、キリストから受けることができる。わたしたちは自分たちがする働きを決して自分たちの功績にしてはならないことをつねに覚えていよう。わたしたちのうちに良いものは何もない。そうであるから、わたしたちは自分に栄光を帰そうとしてはならない。神が一切の栄光をお受けになるべきである。……

たえずわたしたちは、神のみ言葉の指示に従って、自分たちと他の人々を高めようと大いに努めるべきである。わたしたちにあるすべての力をつくして、キリストがわたしたちの前に置かれた品性の標準に達するよう努めるべきである。これこそ神がわたしたちにしてほしいと望んでおられることである。わたしたちが謙遜な信仰によって、キリストを自分の能力、自分の力、自分のすべてのすべてであるお方としてより頼むとき、そのときこそ、わたしたちの働きに神の力が臨むのである。

キリストのみ言葉は天と地に密接なつながりがあることを示しており、また、神は 真理の力を信じる者たちに、世に対してはなさらないような方法で、ご自分を表され ることを示している。もし牧師が自分たちから去るなら途方にくれてしまうと考えている かのような人々がいる。なぜ彼らは自分たちの無力な魂をキリストにあずけないのであ ろうか。なぜ彼らは自分たちには牧師はいなくても、イエスが共にいてくださるという ことを信じないのであろうか。彼らには祈りのうちに牧師に伝道地までついていかせな さい。キリストはご自分がなさった働きを、彼らもすることができると彼らに言われた。 このお方は、「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子に よって栄光をお受けになるためである」と仰せになっている(ヨハネ 14:13)。しかしこ のお方は、ご自分のうちに宿っていない者たちにはこのように仰せにならないのである。

霊的な助けを求めて人間に頼ってはならない。肉なる者を自分の腕とする誘惑に抵抗しなさい。地上の父親に子供たちが目を向けるように、神に目を向けなさい。このお方が約束されたとおり、あなたを愛し、あなたを助けてくださると信じなさい。(ゴ スペル・ヘラルド 1901 年 3 月 1 日)

あなたへのみ約束

「〔イエスは言われた、〕何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。」(ヨハネ 14:14)

わたしたちの魂の敵は、わたしたちからこれらの尊い約束を盗み去り、わたしたちの目の前に闇を投じて、神がわたしたちに与えようとなさる良い物をわたしたちが用いることができないようにすることを喜ぶ。神はわたしたちがこのお方との正しい関係に入るや否や、わたしたちのために偉大なことをしようと待っておられる。しかし、もしわたしたちが疑いと不信の中にい続けるならば、敵はわたしたちの思いを支配し、神のみ約束を妨害することができる。不信はいつもわたしたちの魂にとって大損失という結果に終わるのである。キリストが訪問されたある場所については、「そして彼らの不信仰のゆえに、そこでは力あるわざを、あまりなさらなかった」と言われた(マタイ13:58)。もしわたしたちがキリストを信じる信仰を表明しないなら、このお方はわたしたちのために働くことがおできにならないのである。わたしたちは神を信じる信仰を持つように自分たちの魂を訓練すべきである。しかしその代わりに、疑うようにと自分自身を教育する者たちが何と多くいることだろう。……

あなたは「雲と暗闇と落胆が、わたしの思いをおおうときに、いったいどのように信仰を語り、信仰を持つことができるでしょうか。とても信仰を語る気にはなれません。とても語るような信仰があるような気がしません」と言う。しかし、なぜあなたはこのように感じるのであろうか。それはあなたがサタンに濃い影をあなたの道に投じることを許し、イエスがあなたの道に降り注いでおられる光を見ることができないからである。しかしまた他の人々は、「わたしは非常に率直なので、ただ自分が感じることだけを話し、自分が考えることだけを語ります」と言う。それは最上の方法だろうか。否、神はわたしたちが自らを教育し、正しい言葉一他の者たちへの祝福となり、彼らの魂の上に光線を降り注ぐ言葉一を語るよう望んでおられる。

わたしたちが時には経験したいような喜びがないとしても、それでもなお神のみ約束はキリスト・イエスにあって、しかりでありアアメンであると保証されていることを感じられないであろうか。神のみ約束は感情によるものではない。それらは光が暗闇とははっきり区別されているように、感情からはっきりと区別された基礎を持っている。わたしたちは原則によって行動することを学ばなければならない。そして、わたしたちがこうすることを学ぶとき、わたしたちは理解をもって行動するようになり、変化する感情によって支配されなくなる。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1889年11月11日)

地下室の中に入り込み、自分たちが暗闇にいると言って嘆くとすれば、何と愚かなことであろう。もし光を望むのなら、わたしたちはもっと高い部屋に上がらなければならない。光のうちに来ること、すなわち神のご臨在のうちに来ることは、わたしたちの特権である。(同上 1896 年 5 月 7 日)

ああ、神のみ約束を信じるように魂を教育しなさい。もしこのお方がわたしたちを愛しておられないなら、このような約束をなさるであろうか。わたしたちはこのお方によって買い取られた所有物であり、しかも無限の値によって買われたのである。(同上 1893 年 1 月 16 日)

条件にもとづいて送られる慰め主

「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。」(ヨハネ 14:15-18)

神あるいはサタンのいずれかが知性を支配するのである。もし人が神との生きたつながりを維持しないのなら、彼は別の指導者につながっていることを示し、その指導者が彼の思いを支配し、彼を闇の中に閉じ込めて、真理の証拠を見ることができないようにするのである。世は真理のみ霊を受けることができない。なぜなら彼らは、救いに至る知恵を与える真理を研究してこなかったからである。(レピュー・アンド・ヘラルド 1899 年 7 月 18 日)

イエスは、もしわたしたちがご自分を愛し、ご自分の戒めを守るなら、み父にお願いしよう、そうすればみ父はわたしたちを祝福するために慰め主を送られるであろう、と言われる。(同上 1880 年 4 月 1 日)

神はあなたにこの約束をなさったのである。あなたが落胆するとき、助けを得ようと人間に頼ってはならない。キリストは慰め主があなたと共におられると宣言なさる。祈りのうちにただちに神の許に行きなさい。このお方の前にひれ伏し、「主よ、わたしをお助けください。わたしは困難な状態にあり、どうしたらよいか分からないのです。あなたはご自分の子らに、あなたの名によって求めるものを与えると約束なさいました。わたしたちは敵の誘惑に抵抗するための力を求めます」と言いなさい。

このようにしてあなたは最も価値ある経験を得るようになる。せつに主を知ることを求めるとき、あなたは主はあしたの光のように必ず現れいでることを知るであろう。そしてあなたが助けと慰めを受けるとき、神をたたえて讃美しなさい。神と語りなさい。こうしてあなたは神の友となるのである。あなたはこのお方に頼るようになる。あなたは頼る気がしてもしなくても信頼する信仰を得るようになる。感情はあなたがクリスチャンであるという証拠ではないということを覚えなさい。神を信じる絶対的な信仰は、あなたがこのお方の子であることを示すのである。神に信頼しなさい。このお方は決してあなたを失望させることがない。(ゴパル・ヘカル・1901年3月1日)

人が律法の違反である罪を放棄するときはいつでも、彼の生活は律法への一致と完全な従順へと導かれる。これは聖霊の働きである。注意深く学んだみ言葉の光、良心の声、み霊の訴えが、人全体すなわち体と魂と霊を贖うために完全な犠牲としてご自分を与えてくださったキリストへの本物の愛を心の中に生み出す。そして愛は従順のうちに表されるのである。(教会への証6巻92)

今表されるキリストの栄光

「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。 わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、そ の人にわたし自身をあらわすであろう。」(ヨハネ 14:21)

わたしたちは怠惰な夢の国にいるのではない。わたしたちはキリストの兵士であり、わたしたちを贖ってくださったお方への忠誠を示す働きに入隊しているのである。救われたとき、しかも永遠に救われたときに、天の家郷においてわたしたちがどのようであるかは、今品性と聖なる奉仕においてわたしたちがどのようであるかを反射したものである。わたしたちはここで、すなわち恩恵期間におかれたわたしたちの場所において、神の戒めを守ることによって、自分たちの忠誠を示さないのであろうか。結果と関係なく、自分たちの創造主の奉仕から背教した諸教会のののしりと憎しみに注意を払うことなく、天の神への忠誠の旗印を上げようではないか。

主は地上に、小羊が行くところにはどこにでもついて行く民を持っておられる。このお方は何千ものバアルにひざをかがめなかったご自分の者たちを持っておられる。このような者たちは、このお方と共にシオンの山に立つのである。しかし彼らはこの地上において、すべての武具に身を固めて、今にも滅び行く人々を救う働きに携わる用意をして立たなければならない。……

わたしたちはキリストに従うために、天に移されるまで待つ必要はない。神の民はこの地上においてそうすることができる。わたしたちはここで神の小羊に従うときにのみ、天の宮廷において従うのである。天でこのお方に従うことは、今このお方の戒めを守ることにかかっている。わたしたちは発作的にあるいは気まぐれに、自分たちの益になるときのみキリストに従うべきではない。わたしたちはこのお方に従うことを選ばなければならない。わたしたちは日々の生活において、群れが信頼して羊飼いに従うように、このお方の模範に従わなければならない。わたしたちはこのお方のために苦しみを受け、一歩ごとに「たとえ神がわたしを殺しても、わたしはこのお方により頼む」と言いながら(ヨブ13:15 英語訳)、このお方に従うべきである。このお方の生活習慣が、わたしたちの生活習慣とならなければならない。そしてわたしたちがこのお方のようになることを求め、自分たちの意志をこのお方のご意志に一致させることを求めるとき、わたしたちはこのお方を表すのである。

わたしたちは確固たる忠誠をもって、キリストに従っているであろうか。眺めることによってこのお方のみかたちに変えられるために、つねにこのお方の完全な従順と純潔と自己犠牲の生活をつねにわたしたちの前に保ちつつ、キリストに従っているだろうか。わたしたちはこのお方の忠実さを模倣しようと懸命な努力をしているであろうか。もしわたしたちが、あなたがわたしの模範〔型: Pattern〕となってくださいと言うように自らを教育するなら、また信仰の目によってこのお方を生ける救い主として見るなら、わたしたちはこのお方に従うようにと強められるのである。そのとき、汚れのない者と共に、わたしたちは来世でこのお方に従うのである。目と心で目撃した証人として、わたしたちはこのお方の威厳についての証を担うことができる。なぜなら信仰によってわたしたちはこのお方と共に聖なる山にいたからである。(レピュー・アンド・ヘラルド1898 年 4 月 12 日)

主の御前にふさわしく

「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう。」(ヨハネ 14:23)

イエスはこのお方のご臨在を受け入れるようにとわたしたちを招いておられる。わたしたちは心の扉を開き、このお方に入っていただくべきである。しかし、このお方は分かたれた心を共有なさることはない。もしそれが富に仕えるために捧げられているなら、もし利己心と誇りがその部屋を満たしているなら、天来のお客のための場所はないのである。このお方は、魂の宮が空になり、きれいにされるまで、わたしたちと共に住まわれることはないのである。(レピュー・アンド・ヘラルド1885年11月24日)

わたしたちが心の扉からがらくたを取り除くとき、主はお入りになり、わたした ちと共に住まわれる。(同上 1889 年 4 月 16 日)

み霊によって父と御子は来られ、あなたと共に住まわれる。揺れ動いたり、罪を犯したりすることについては言い訳の余地はない。しかし直くあるためには、あなたはこれらすべての豊かで十分なみ約束を記憶の部屋にとどめておかなければならない。思いからすべての好ましくない、愚かなものを取り除きなさい。ここであなたが聞いてきた尊い真理を保ち続けなさい。そうすれば、「敵が洪水のごとく押し寄せるとき」、これらの尊い黄金のみ約束の言葉が思い起こされ、あなたの魂を強めるのである。「敵が洪水のごとく押し寄せ」あなたを岩から一掃しようとするとき、「主のみ霊は彼に向かって旗印を掲げられる」(イザヤ 59:19 英語訳)。その旗印とは何であろうか。イエスは荒野の試みにおいて敵にどんな武器を示されただろうか。神のみ言葉である。このお方は、「こう書かれている」と言われた。

さて、あなたは何が書かれているかを覚えるべきである。そして敵が来て、自分と共にイエスをお連れすることができない娯楽の場をあちこち求めるように誘惑するとき、断固としてただ、「いいえ、わたしはそこに行くことができません」と言いなさい。決意を固め、いかに真っ向から「いいえ」と言うかを心得なさい。(パイプル・エコー 1893 年 1 月 15 日)

神の律法が品性の試金石となるべき基準である。もしわたしたちが自分自身に都合の良い基準を立て、自分で考え出した標準に従おうと試みるなら、わたしたちは天を確保するのに完全に失敗することになる。(レピュー・アンド・ヘラルト゚ 1885年11月24日)

地上におけるこの生涯は、テストと試みの時である。神の天使たちは品性の発達を見守っており、道徳的価値を測っている。すべての問題はこれで決まるのである。すなわち、彼は神の戒めに従順であろうか、それとも不従順であろうか。罪人は、キリストの功績を通して、この世で従順な僕へと変えられたであろうか。それによって、天の社会に入り、キリストとの共同相続人として受け入れられるのにふさわしい者となったであろうか。(同上 1891 年 7 月 21 日)

助け主は教え、思い起こさせて下さる

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」(ヨハネ14:26)

キリストのみ言葉をわたしたちに思い出させるのは、聖霊である。キリストが 弟子たちへの最後の説教において熟考するために選ばれた主題は、聖霊の任務 についてであった。このお方は彼らの前に広範囲にわたる真理を明らかになさっ た。彼らは信仰によってこのお方のみ言葉を受け入れなければならなかった。そ うすれば助け主であられる聖霊が、すべてのことを彼らに思い出させるのであっ た。この約束のうちにキリストによって与えられた慰めは、神の感化が最後までこ のお方の弟子たちと共にあるという事実に見出されるのであった。しかしこの約 東は今日、民に受け入れられておらず、信じられてもいない。それゆえに、その 約束は彼らに大切にされてもいなければ、その成就は教会の経験のうちに見ら れもしないのである。神の御霊の賜物の約束を、教会はたい考える必要もない 事柄として放っている。それは人々に印象づけられておらず、そのために結果は 予期された通り一霊的干ばつ、霊的暗黒、霊的退廃と死だけである。さして重 要ではない事柄が思いと魂を占めているが、教会の成長と繁栄のためになくては ならない、またもし所有するなら、他のすべての祝福を次々ともたらす神の力が、 無限に豊かにわたしたちに提供されているにもかかわらず、その力に欠けている。 教会が小さな事柄に満足している間は、神の大いなる事柄を受ける資格がない のである。

しかし、聖霊の賜物こそ心が清く保たれることのできる手段なのに、なぜわたしたちはそれを求めて飢え渇かないのであろうか。主は神の力が人間の努力と協力するようにと計画しておられる。クリスチャンにとって、わたしたちの主イエスの再臨直前の聖霊の約束の意味を理解することは、実に重要不可欠である。(家庭伝道1893年11月1日)

神が聖書の勤勉な探求によって得られた知識を、ちょうど必要とされるその時に、あなたの記憶にひらめかせて下さることを驚く必要はない。しかし、もしあなたが猶予期間の尊い時間が過ぎ去るままに、あなたの思いやあなたの子供たちの思いを真理の宝石で満たすことを怠るなら、またもしあなたがキリストの言葉に親しまないなら、もしあなたが試練のときにこのお方の恵みの力を一度も試したことがないなら、あなたは聖霊がキリストのみ言葉をあなたに思い出させてくださることを、期待することはできない。わたしたちは日毎にわたしたちの愛情をつくして神に仕え、それからこのお方に信頼すべきである。(レピュー・アンド・ヘラルド1890 年 4 月 15 日)

世を超越した平安

「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。 わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ 14:27)

あるとき、ある不信者がムーディー氏と自分の不信の問題について論じるためにやってきたと言われている。この福音伝道師はこの不信者に、「これらの事柄を話す前に祈りましょう」と言った。そして彼らはひざまずいて、ムーディー氏が祈っている間、神はこの人の心を変えられた。論争では失敗したはずのところで、働いて下さったのは神であった。この方法に基づいて働こう。そして、互いのために祈り、生きた信仰によってお互いをまっすぐ神の御前へと連れて行こう。主は心のすべての思いと感情をご存じである。そして何とたやすくこのお方はわたしたちを溶かすことがおできになることであろう。何とたやすくこのお方のみ霊は、冷酷な心を、火のようにやわらげ、岩を、金槌のように粉々に砕くことができることだろうか。……そしてイエスがあなたのもとに来られるとき、このお方は優しく、「安かれ」と言われる。このお方は世が与えるような平安をお与えにはならない。そうではなく、あらゆる理解を超えた平安を与えてくださるのである。そしてあなたのうちにキリストの平安があれば、あなたは兄弟が落ちていくのを見るとき、ちょうど正しい時に正しいことを言うことができる。(同上 1888 年 8 月 28 日)

わたしたちはつねに祈りのうちにひざまずくことはできないが、このお方の祝 福を求めてたえず心が神に上っていくようにすることができる。そのとき、わたし たちは思いをこの状態に保つかぎり、確実に助けを得るのである。悪天使たちは 彼らの暗闇をもってあなたにおし迫ろうと四方を囲んでいるかもしれないが、神 のみ旨は彼らの力に勝っている。そしてもしあなたが言葉においても行動におい ても、またどのようなかたちにおいても、キリストがあなたを恥ずかしく思われる ようなことをしないならば、神のすばらしい祝福と平安が、あなたの生きる限り日々 あなたの心にあるのである。……わたしたちは必ず困難に出会うし、それらに直 面し克服するためには、イエスにわたしたちと共にいていただかなくてはならない。 サタンは、あなたが非常な大罪人であり、祈っても意味がない、イエスはあなた の言うことをきいては下さらないからと言うであろう。しかし、あなたは自分が罪 人であることが、まさに祈る必要がある理由なのだと言うことができる。なぜなら キリストは罪人を救うために来られ、罪人がこのお方の許に来て救われるために カルバリーの十字架上で死なれたからである。あなたの周囲に聖書の壁を築きな さい。そのときあなたは世がそれを壊すことができないことを見るであろう。聖書 を暗記しなさい。そしてサタンが誘惑を持ってくるとき、彼に「こう書かれている」 をまっすぐ投げ返しなさい。これこそ、わたしたちの主がサタンの誘惑に立ち向 かい、それらに抵抗された方法である。イエスのご臨在と光と愛なしに生きるこ とをしないと決心しなさい。その時あなたは、尊い勝利を得、どなたがあなたの 力の源であるかを知るようになる。(レビュー・アンド・ヘラルド 1888 年 4 月 10 日)

罪との調和はありえない

「〔イエスは宣言された、〕この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない。」(ヨハネ14:30)

有罪に定めることができる何かを探し出そうとして、妬みに満ちた鋭い目がキリストを見張っていた。しかし何も見出すことができなかった。……一つの嫉妬も、世俗的野心も、誇りも、利己心もこのお方のうちに見出すことはできなかった。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ 1900 年 8 月 29 日)

わたしたちの救い主に対するサタンの誘惑の力を完全に理解することは、人にとって不可能である。抵抗するのが非常に困難だと人が感じるすべての悪への誘惑が、神の御子にもたらされ圧迫したが、それはこのお方のご品性が堕落した人間の品性よりすぐれていた分だけ、はるかに大きな度合いでもたらされたのであった。(預言の霊 2 巻 88)

キリストのうちにはサタンが乗じることができるものが全く何ひとつなかった。イエスは一つの間違った行動、一つの疑い、または一つの不満の思いによってさえも、ご自分の魂を汚されなかった。わたしたちは思いの扉を開いてサタンのほのめかしを招くこともできるし、あるいはイエスのそば近くに押し進むことによって、すべての悪の感化に抵抗するための力を得ることもできるのである。(レピュー・アント゚・ヘラレト゚ 1883 年 11 月 6 日)

ああ、誘惑されたときに、各自が、主のように「この世の君が来るからである。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」と言うことができたなら(ヨハネ14:30)。わたしたちは利己的で邪悪な事柄を口にするように導かれることがないために、天父が植えられなかったすべての植物を自分たちの心から根こそぎ引き抜きたいのである。ああ、もっと多くキリストを、そしてもっと少なく自己を、と願う。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1888年3月23日)

サタンは、神のみ子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである。

われわれが、キリストの贖罪の血を信じることによって、罪を捨て去らなければならないのは、現世においてである。われわれの尊い救い主は、われわれが彼と結合して、われわれの弱さを彼の力に、われわれの無知を彼の知恵に、われわれの無価値さを彼の功績に結びつけるよう招いておられる。神の摂理は、われわれがイエスの柔和と謙遜を学ぶ学校である。主はわれわれの前に、われわれが選ぶ安易で楽しく思われる道ではなくて、人生の真の目的を、常に置かれる。われわれの品性を天の型に形造るために神が用いられる手段に、われわれは協力しなければならない。このことを怠ったり、遅らせたりする者は、必ず魂を最も恐ろしい危険にさらすことになるのである。(各時代の大争闘下巻397,398)

もっと実を結ぶために剪定(せんてい) される

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。」(ヨハネ15:1,2)

ぶどうの木の力と栄養が豊かな葉に取られるために、ぶどうの木が剪定されない限り、果実が完全なものとならないように、クリスチャンの力は、天来の農夫が不必要な成長を剪定しない限り、その真の目的を果たさないのである。繁栄のときにイエスの弟子たちは、しばしば彼らの思いと活力を、自己満足のために、また世俗の宝を確保するために、また安逸や快楽や贅沢の楽しみに向けてしまい、神の栄光のためにはほとんど実をみのらせない。そのとき、天来の農夫は、枝を実り豊かにするために、失望、損失、死別などといった剪定ナイフを持ってきて、成長を妨げているものを切り払うのである。

ある夜、深い苦悩のためひどく気落ちした男性が庭園を歩いていた。そこで 彼はほとんど幹が切られてしまっているざくろの木を見た。大いに不思議に思って、庭師になぜこの木はこのような状態なのかを聞いた。そこで彼は自分自身の 苦しい心の傷のわけを説明する納得のいく答えを得た。「はい、以前は、この木は力強く枝葉を出したので葉のほかに何も実らせなかったのです。わたしはやむを得ずこのように切ったのです。そしてほとんど切り倒さんばかりのときに、実を 結び始めたのです」と庭師は答えた。

わたしたちの悲しみは地面から生じるのではない。すべての苦難において神はわたしたちの益となるご計画を持っておられる。偶像を破壊するすべての一撃、また地上への執着を弱め、わたしたちの愛情をもっと固く神に結びつけるすべての摂理は、祝福である。剪定はしばらくの間、つらいかもしれないがそれは後には、「平安な義の実を結ばせるようになる」(ヘブル 12:11)。わたしたちは良心をよみがえらせ、思いを高め、生活を高尚にするものは何であっても喜びをもって受け入れるべきである。実を結ばない枝は切り取られる。……つらい剪定を通して、わたしたちが生けるぶどうの木との接触を保つことができることを感謝しよう。なぜなら、もしわたしたちがキリストと共に苦しむなら、このお方と共にまた支配するからである。最も厳しくわたしたちの信仰に重くのしかかり、あたかも神がわたしたちを見捨てられたかのように思わせる試練そのものが、わたしたちをもっとはっきりとこのお方へと導くべきである。それは、すべての重荷をキリストの足元に置き、その代わりにこのお方がわたしたちに与えてくださる平和を経験できるためである。(レピュー・アンド・ヘラルド 1894 年 4 月 10 日)

このお方のみ言葉によって清められ育まれる

「あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない。」(ヨハネ15:3,4)

枝はイエス・キリストを信じる信者を描写している。真に信じる者たちはこのお方がなされた同じ働きをするのである。彼らは愛によって働き魂を清める信仰によって、キリストに結ばれている。枝が親木から流れる樹液によって養分を受けるように、キリストを信じる信者はキリストの命によって維持されるのである。枝がそれに属するすべての小さなつるを含んでいるように、枝はキリストの弟子の一番若い者を表している。イエスはわたしたちの中心であられる。このお方は枝を保つ親木であられる。このお方のうちにわたしたちの永遠の命が集中している。このお方がわたしたちに語られた言葉は霊であり命であって、このお方のみ言葉を食し、このお方のみ言葉を行う者たちは品性においてこのお方を表す。このお方の忍耐と柔和、へりくだりと愛が、彼らの心に充満するのである。(レピュー・アンド・ヘラルド1896年1月14日)

信仰によってキリストを受け入れるすべての者たちは、このお方と一つになる。 枝はぶどうの木にしばられているのでもなければ、ぶどうの木に人工的な留め具 といった機械的な処理でつながれているのでもない。枝はぶどうの木の一部とな るために、それにつながっているのである。枝はぶどうの木の根によって養分を 受けている。同様に、信仰によってキリストを受け入れる者たちは原則と行動に おいてこのお方と一つとなるのである。……

バプテスマは何度も何度も繰り返されるかもしれないが、それ自体には人の心を変える力はないのである。心はキリストの心と結合しなければならず、意志はこのお方のご意志のうちに没入しなければならない、思いはこのお方の思いと一つにならなければならない、そして思想はこのお方のとりこにされなければならないのである。人はバプテスマを受け、その人の名前が教会の名簿に載せられても、その人の心は変わっていないということもあり得る。先天的また後天的傾向はまだ、この人の品性において悪を働いているかもしれないのである。

再生された人はキリストと生きたつながりを持っている。枝が親木から栄養分を得、そのおかげで豊かに実を結ぶように、真の信者はキリストとつながって、自分の生活に御霊の実をみのらせるのである。枝はぶどうの木と一つになる。嵐はそれを運び去ることはできない。霜もその生命力を滅ぼすことができない。何ものもそれをぶどうの木から離すことはできない。それは生きた枝であり、それはぶどうの木の実を結ぶのである。信者も同様である。良い言葉と良い行動によって彼はキリストの品性を表すのである。(同上 1900 年 9 月 18 日)

ぶどうの木へのつながり一罪からの分離

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。」(ヨハネ15:5)

見せかけの結合と、信仰によるキリストとの真のつながりには大きな相違がある。真理の公言によって人は教会の一員となるが、しかしこれは彼らが生けるぶどうの木との生きたつながりを持っている証拠とはならないのである。キリストに従うと公言はするがこのお方を信じる信仰を持っていない者たちから、真の弟子を区別することのできる標準が与えられている。一種類は実を結ぶ者であり、他は実を結ばない者である。一方はもっと実を結ぶようにとしばしば神の剪定のナイフを受けるが、他方は枯れた枝として、まもなく生きたぶどうの木から切断されるのである。……

このみ言葉に述べられているよりも、もっと近く親密なキリストとの関係を思いつくことができるだろうか、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」。 枝の繊維はぶどうの木の繊維とほとんど同一である。株から枝への命と力と豊かな実りの伝達は、妨げられることなく絶え間ないものである。根は栄養分を枝まで送る。これが真の信者のキリストとの関係である。彼はキリストに宿り、このお方から栄養分を得るのである。

この霊的関係は個人的信仰を働かせることによってのみ確立され得る。この信仰はわたしたちの側で最優先、完全な信頼、全くの献身を表明しなければならない。わたしたちの意志は完全に神の御旨に屈服し、わたしたちの感情、願い、関心、誉れはキリストの王国の繁栄とこのお方のみ事業の誉れとに一致しなければならない。わたしたちは絶え間なくこのお方から恵みを得、キリストはわたしたちから感謝をお受けになるのである。

このつながりと交わりの親密さが形成されるとき、……結合の働きと同様に分離の苦しい働きがなければならない。キリストとの結合に入りたいのであれば、誇り、利己心、空虚、世俗一ありとあらゆる形態の罪一が克服されなければならない。なぜ多くの者たちが、クリスチャン生活をこんなに嘆かわしいほど難しく感じ、またこんなに気まぐれで変わりやすいかという理由は、彼らがまず初めに自分たちをこれらの大切にしている偶像から分離することなしに、キリストにつながろうと努力するからである。

キリストとの結合が形成された後、それは真剣な祈りとたゆまない努力によってのみ保つことができる。わたしたちは自己に抵抗し、それを否定し、克服しなければならない。キリストの恵みを通して、勇気によって、信仰によって、見張りによってわたしたちは勝利を得ることができるのである。(教会への証5巻228-231)

すべてがかかっている

「人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。 人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。」(ヨハネ 15:6)

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった、それはキリストに宿る者たちが神の子となるためである。ここにすべてがかかっている。わが兄弟姉妹方よ、あなたがたはこれにどのように応じるであろうか。世俗的な考えや世俗的な習慣また慣習が、あなたの生活と品性に入ってくるのを許すのだろうか。この人やあの人が何というかを調べるのだろうか。それともそのひとり子さえわたしたちから差し控えなかったほど、この世を愛されたお方を見ているだろうか。神は人性が神性と結合することによって、欲のために世にある誘惑に勝利することができることを人に示すためにキリストを与えられた。この結合をわたしたちは経験しなければならない。わたしたちは真のぶどうの木の生きた枝となり、日毎にわたしたちの贖い主をつかまなければならない。……

生ける信仰によってこのお方の神性の力をつかまない限り、あなたは神の命によって量られているその命を受け損なうのである。わたしたちはその命を受け損なうようなことはできない。わたしたちは不注意で、無頓着で、利己的な生活を送る余裕はない。なぜならそのようなものを神は受け入れることがおできにならないからである。……

わたしたちが必要としているものは……キリストに宿る信仰、このお方の力をつかむ信仰、このお方に従順な信仰、自己否定と自己犠牲の十字架をになうようにわたしたちを導く信仰である。これは魂をキリストに結合させ、わたしたちをこのお方と一つにする。

もしわたしたちが自分たちの悪習慣と慣習を切り去るなら、わたしたち一人ひとりに、主はこの特権を差し出しておられる。自分たちの悪習慣、ゆがめられた食欲と激情を保持しながら、最終的には自己否定の状態に入ることができると考える者たちが多くいる。しかし利己心にふけるのが長ければ長いほど、それから脱却することは難しくなるのである。主が今必要としておられるのは、伝道精神を持っている男女であり、キリストがなぜご自分の生命をお与えになったか、なぜこのお方がご自分の王衣と王冠を脱いで、貧困のうちに成長なさる小さな子供としてこの世に来られたかを理解する男女である。

もしあなたの背信を悔い改め、主に帰り、あなたの生活から悪習慣や悪い気質や心のかたくなさを切り捨てるなら、主はこの会衆のすべての魂の罪を許す力を持っておられる。あなたが必要としているものは、キリスト・イエスのうちにあった人性、すなわち神性をしっかりとつかんだ人性である。その神性をつかみ、そしてそれをあなたの生活に取り入れなさい。そうすればあなたは命に至らせる命の香りとなるのである。(世界総会公報5月17日)

このお方をみ言葉どおりに受け入れる

「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヨハネ 15:7)

「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば」という言葉は(ヨハネ 15:7)、信者の心の中に宿るとき、その品性を変化させるキリストの言葉である。それらは、死んだ文字ではなく、霊であり命である。それらはすべての行動に対する原動力である。もし、それらが軽視され、名目的に受け入れられて、わたしたちのうちにおいて働くことがないなら、それらは無益であって、裁きのときにわたしたちを罪に定めるだけである。わたしたちはそれらの感化の下でより良い成長をとげることなく、たえず品性において悪化し、ますます不注意になり、ますます身勝手になり、ますます自尊心に満たされて、自分自身のうぬぼれのうちに得意になっていく。わたしたちは、それらの知識を持っていないより、よほど悪いのである。キリストのみ言葉は、人に願いを起こさせ実現に至らせるように導くのが目的である。それらは推進力であり、人に決意させ、行動させるのである。(サインズ・オブ・タイムズ1891 年 12 月 28 日)

わたしは〔病気に苦しんでいるわたしの双子の姉妹〕に、「あなたを楽にするために、わたしのできる範囲であれば、望むものは何でも言ってください。それを差しあげましょう」と手紙を書いた。彼女はわたしが本気で言っていることを信じた。彼女は自分にとって大きな祝福となるだろうと思って、うわさに聞いた車椅子について書いてきた。彼女のために一台が選ばれた。そして、彼女はわたしがそれを購入するだろうとすっかり信じきって手紙をよこした。彼女がわたしの言葉には信頼することができたというのに、イエスのみ約束を信じることができなかったのはどうしたことだろう。わたしが彼女に手紙を書くときこの問題をこの光のうちに示すつもりである。

ある姉妹がオークランドにおいてわたしのもとに来て、「わたしに『四巻』が改 訂され拡張されたら、それを下さると約束したのを覚えておられないのですか」と 言った。「そうでしたか」とわたしは言った。「そして、あなたは、わたしが本気で そう言っていると、本当に信じたのですか」。「もちろんです」と彼女は答えた。「ど うしてそう思ったのですか」とわたしは尋ねた。「ただわたしがそう約束したからと いって、わたしがそうすると考えるのは変ではないですか」。彼女は驚いてわたし を見た。彼女は自分の神を信じる信仰の欠乏についてわたしに不満を述べてきて いたのであった。「さて、あなたがわたしの約束は信じることができるのに、あな たの天のみ父の言葉には信頼できないというのはどういうことですか。みじめで間 違いを犯しがちな死すべき者に信仰をおくことができて、変わることのない神に信 頼することができないということはどういうことですか。わたしは自分の約束を忘 れてしまいました。しかし神は決してお忘れにならないのです。わたしの言葉に信 頼したように、どうしてこのお方の言葉どおりに信頼できないのですか」とわたし は言った。わたしたちはこのお方が仰せになることは言葉どおり本気なのだという ことを信じて、神のみ言葉どおりにこのお方に信頼し、信仰によって歩きだすとき、 このお方に誉れを帰すのである。……「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたし たちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも 賜わらないことがあろうか」(ローマ8:32)。(レビュー・アンド・ヘラルド1889年3月19日)

一年中実がつく果樹

「あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう。父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛したのである。わたしの愛のうちにいなさい。」(ヨハネ 15:8, 9)

実を結ぶこと……が弟子の条件である。結ぶべき実とは何であろうか。品性の純潔さ、無私の行い、キリストのような言葉である。この実を結ばない者たち、その生活がキリストの優しさを表さない者たちは、神の代表者として受け入れられないのである。

わたしたちが神に栄光を帰する実を結ぶためには、わたしたちの心がキリストの愛に満たされなければならない。わたしたちはこのお方の柔和とへりくだりを、このお方から学ばなければならない。そのときわたしたちは、自己称揚のために躍起になることはない。キリストに似ていない自分自身の特性を維持する者たちは、救い主と一つになることによって聖化されていないのである。自己がとても目立つので、キリストが見えないのである。人がキリストの犠牲とへりくだりの完全さをもっとはっきりと見るとき、彼らはこのお方と一つになることによって把握できることを、もっとよく理解するのである。

クリスチャンとは聖霊によって心が支配されている者である。神の愛が彼の魂に行き渡っている。彼は自分に栄光を得るためではなく、また自分に仕えるためでもなく、自分に命を与えてくださった方に仕え、栄光を帰すために生きることを願うのである。(オーストラレーシア連合総会記録 1903 年 11 月 15 日)

クリスチャンの品性の完成へ向かって体を伸ばし、神のみ旨への一致のためにたえず邁進(まいしん)することは、わたしたちの一生の働きである。地上で始められた努力は、永遠にわたって続くのである。人に対する神の標準は、その言葉の最高の意味にまで高められる。そして、もし彼が神から与えられた人格にふさわしく行動するならば、彼はこの生涯において幸福を増進する。そしてそれは来るべき生涯における栄光と永遠の報いへと導くのである。

人類家族のメンバーたちは、彼らが自分たちのタラントを、可能なかぎりのあらゆる方法で、他人の益のために用いるときのみ、男また女という名を名乗る権利を与えられているのである。キリストのご生涯が模範としてわたしたちの前にある。そして、憐れみの天使のように、他人の必要に仕えるときに、人は神との密接な協力関係に入るのである。幸福な家族と幸福な社会を作るのが、キリスト教の本質である。……

キリストは堕落した人類を救うための努力に倦み疲れたであろうか。わたしたちの働きは、継続的な辛抱強い働きであるべきである。わたしたちは主人がわたしたちの武具をこのお方の足元に置くようにとお命じになるまで、なすべき働きを見出すのである。神は道徳的な統治者であられる。そして、わたしたちはこのお方のみ旨に従順に、働きがなされる必要があるときはいつでもわたしたちの義務に喜んでただちに取り掛かる用意をして、待機していなければならないのである。(教会への証4巻520)

分かちあう勝利の満ち満ちた喜び

「もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである。わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。」(ヨハネ 15:10, 11)

〔救い主〕は、ご自身と、ご自分の働きおよびみ父と共に宿る経験を、わたしたちに命じられた経験と働きに比較しておられる。なぜなら彼は人性と神性の結合を代表しておられるからである。神性の性質をつかんで次のように言うのは、わたしたちの特権である。主よ、あなたは約束されました。わたしたちは自己否定と自己犠牲の精神を与えてくださることを求めます。わたしたちを助けて、あなたのうちに宿るとはどういう意味かを理解させてください、と。

キリストに宿るということは、あなたが神性の性質にあずかる者になるという意味である。人性が神性をつかむとき、あなたは神性の力を得るのである。しかし、もしあなたがあくまで古い習慣と自己放縦のならわしに執着し、魂の重荷を負うことを拒むなら、あなたは自分自身の魂を失うことになる。あなたは自分自身の魂の価値を高く評価しなくなり、またまっすぐな働きを実行しなくなる。自分の魂を清めることはすべての信者の特権であり、それによって栄光の王国において神の命によって測られる命を持つことができるのである。栄光の王国において、東遠の世々にわたって生きる一これがわたしたちずべての者が願うことである。しかし、もしわたしたちが自分の習慣と傾向に従い続けるなら、決してそうすることはできない。ああ、魂の上にこの重荷がおかれ、自分たちが勝利者になるなら、他の者たちに勝利するように助けることができるということを彼らが悟るならば。

勝利する働きは、喜びのない働きではない。否、決してそうではない。それは天との交わりを意味している。あなたは祈りのうちに神の許に行くことができる。あなたは求め、受けることができる。あなたは信じ、自分の無力な魂をキリストにゆだねることができる。それは人性が神のみ旨と方法を行うことができることを意味している。人性と神性はまさにこの目的のために結合しているのである。ああ、もしすべてのクリスチャンと公言している者たちが、ありのままキリストの許に来て、自己否定を実践し、実のない枝は切り取っていただき良い枝が伸びることを許すなら、何と違った世界になることだろう。キリストにたえず宿るというこのような経験は、真理の知識へと導かれる結果を魂にもたらす。主よ、今日、わたしに何をおさせになるのですか。あなたの光をわたしの上に照らしてください、という嘆願が神の前に上がるようにしよう。恐るべき試練がわたしたちの世に襲ってくる。そして、世は自らそれに備えているのである。わたしたちもまた、準備できていなければならない。わたしたちの天父の保護を得ることができるように。(世界総会公報 1909 年 5 月 17 日)

兄弟間の喜ばしい調和

「わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも万に愛し合いなさい。」(ヨハネ 15:12)

サタンはわたしたちの間に来て、もしできるなら不和の種を撒くのである。わたしたちは、どのように彼に抵抗するのだろうか。各自が自分自身の心のうちに兄弟に向かって愛と寛容を培うことによってである。もしあなたが兄弟のだれかが過ちに陥っているのがわかったなら、彼に背を向けて、彼に不利になることを語ってはならない。かえって、彼を優しく扱うことによってどのくらいの善をすることができるのかを見なさい。利己的感情が起こるのを許し、個人の尊厳を守ろうとする代わりに、自己が視野から消えるようにしなさい。イエスはご自分の長い人間のみ腕をもって堕落した人類を抱擁し、彼らを無限のお方の御座につなげようとしておられる。これが、あなたの携わるべき働きである。あなたがたの不和によってイエスを落胆させてはならない。

たとえ自分が正しいと思っても、あなたは自分の個人的な考えを前面に強く押し出し、それらが不一致を引き起こすようなことをすべきではない。自分に間違いはありえないという立場を取ってはならない。だれでもみな間違いを犯すものである。だれもがみな自分たちの目に、まことの証人によって語られた目薬を塗る必要がある。それは、彼らが自分自身を神がご覧になるとおりに見ることができるためである。

ここに共に働いている二人の兄弟がいる。もしキリストの精神が彼らの心を支配しているなら、これらの兄弟たちが互いに戦っているところを見出されるであろうか。彼らが互いに対して妬み、邪推、恨みを抱くだろうか。それはあり得ない。どちらも、自分の兄弟を過小評価しながら、自分のことは高く見なすようなことはしないのである。互いに相手を自分よりすぐれた者とするのである。〔ヨハネ 13:34, 35 引用〕。ここで話されている愛は、感傷的なものでも、程度の低い愛でもなく、キリストから愛情をひき出し、それを互いの上に置く愛である。ここに描写されている愛は純潔である。それはイエスに集中させた愛情から起こるものである。……

兄弟がたよ、あなたがたがキリストのものであるという信任状一愛、喜び、平和一をたずさえ行くことは、あなたがたの特権である。あなたがたはこの天来の愛の植物があなたの心に根ざすことを熱心に求め、それがしおれて枯れることのないように優しく大事にするだろうか。キリストが現れるようにしなさい。あなたがたの兄弟が自分に同意しないときは、彼らが間違っていると思うように導く独立の精神を抱いてはならない。あなたがたの兄弟の意見は、あなたの意見があなたにとって貴重であるように、彼らにとっても貴重なのである。あなたのうちにおられるキリストは、彼らのうちにおられるキリストと結合し、そこには喜ばしい結合の精神が存在するようになるのである。……

わたしたちが〔キリストの〕精神を自分たちの心のうちに持つなら、わたしたちはこのお方のうちに一つ思いとなるのである。わたしたちはその時、自分たちの品性にある欠点を覆い隠そうとはしない。そうではなく、わたしたちは熱心にそれらを克服しようと努力するのである。(ヒストリカル・スクッチ・オブ・SDA・ミッション 125, 126)

僕であるばかりではなく友である

「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。」(ヨハネ 15:13-15)

神の律法への完全な従順は、わたしたちの愛がキリストに対して完全であることを伝える試金石である。み父はキリストの友をご自分の友として受け入れ、歓迎することによってキリストへの愛を表される。み父はキリストがなされた贖いに完全に満足しておられる。このお方は、人が神に対する悔い改めと、わたしたちの主キリスト・イエスに対する信仰を働かせる機会を得ることができるように、律法の刑罰をお受けになった。罪人のために、キリストは苦難、侮辱、中傷、虐待、詐称(さしょう)に耐えられたのであった。このお方はご自分が救うために来られた者たちによって拒まれ、ご自身の国民によって拒絶された。栄光の主は、最も恥ずべき死に処せられ、神ご自身がキリストのうちにおられて、世をご自分に和解させるために、ご自分のひとり子と共に苦しまれたのである。これらすべては、堕落した人間が自分自身を贖うためにもう一度の機会を得ることができるために、なされたのであった。キリストはご自分の義を悔い改めた信じる魂に着せ、キリストを受け入れる者は、神の友となるのである。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1896年6月18日)

キリストはどのようにして、ご自分の愛をあわれな死すべき者たちに示されたのだろう。ご自分の栄光、ご自分の富、さらにまたご自分の最も尊い命という犠牲によって示されたのである。キリストは屈辱と大いなる苦しみの生涯に同意された。このお方は激怒した残忍な群集の残酷な嘲りと、十字架上の最も苦しい死を甘受されたのであった。……わたしたちはこのお方の御旨に絶対的な服従を示すときに、キリストの友である証拠を示すのである。言うだけで行わないのは証拠ではない。そうではなく、行うこと、服従することに証拠があるのである。だれが、キリストが愛されたように互いに愛せよとの戒めに服従しているだろうか。(教会への証 1 巻 690, 691 p)

熱心な骨折り、無私の働き、忍耐強く、辛抱強い努力は、豊かに報いられる。イエスは、わたしはもうあなたがたを僕とは呼ばず、友、客と呼ぶ、と仰せになる。主人の是認は、なされた働きの大きさによるのではなく、多くのものが得たからでもなく、わずかなものにおいてさえも忠実であるがゆえに与えられるのである。神が重んじられるのは、わたしたちが達成する偉大な業績ではなく、わたしたちが行動する動機である。このお方は善と忠実さを、成し遂げられた働きの大きさよりも尊重されるのである。(同上2巻510,511)

すべての信者の任命

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。」(ヨハネ 15:16)

わたしたちが最初にキリストに向かって歩み寄ったのではない。わたしたちに向かって最初に歩み寄られたのは、わたしたちの贖い主であった。「そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ12:32)。このお方はご自分の恵みによってあなたの心に触れ、あなたはイエスに応え、引き付けられたのであった。人が最初に行動を起こすことはできない。キリストは十字架上で上げられた。このお方をわたしたちの世界に連れてきたのは、このお方の愛であった。……

任命された牧師は多くはない。このために、あなたは自己を否定して、十字架を取り、キリストの重荷を携え行く必要がある。あなたは来るべき世の力を味わったことがあるだろうか。あなたは神の御子の肉を食べ、血を飲んできただろうか。そうであるなら、もし世にあって牧師の按手があなたに置かれたことがないとしても、キリストはあなたの上に手を置かれ、こう仰せになったのである。「あなたがたはわたしの証人である。わたしがあなたがたに与えたタラントを用いなさい。あなたがたは世の光である。山の上にある町は隠れることができない。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」。教会と世の間には対立があるであろうが、教会は輝くのである。財政的にどのような結末になろうとも、あなたがた自身が世に伝える献身した生ける光の通路となりなさい。

神を真に愛する者たちは、安息日を遵守する大きな教会がいくつもあるところから外に出て行き、自分たちが知らなかったみ事業を探し出しなさい。生けるぶどうの木と生命の結合を持つすべての枝によってなされるべき働きがある。(世界総会日刊公報 1893 年 2 月 4 日)

イエスがわたしたちを愛し、祝福されるのは、わたしたちの富や知識やすぐれた地位のためではなく、わたしたちがこのお方を自分の個人的救い主として信じるからである。イエスはわたしたちがまだ罪人であったときに愛されたが、このお方はわたしたちを選び、わたしたちが行って実を結ぶように定めたと仰せになる。各自に何かすることがあるだろうか。もちろん、キリストとくびきを共にするすべての者は、このお方の重荷を負い、このお方の戦線で働かなくてはならない。クリスチャンは力のない怠惰な者となるべきではない。そうであってはならない。「あなたがたは、神との同労者である」。魂のうちにあるキリストの許しの愛の生涯は、永遠の命へと湧き溢れる水の泉のようである。もし水の泉が心のうちにあるなら、生活全体はその事実を表し、神の元気づける恵みが明らかにされるのである。(サインズ・オブ・ザ・タイムス、1894年12月17日)

愛するということは、自分を否定すること

「これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。」(ヨハネ 15:17)

神からご自分の子供と見なされている者たちは、互いにキリストのような愛を表す。彼らは一つの目的一世にキリストを正しく表すこと一のために生き、働くのである。彼らの愛と一致によって、彼らは世に対して神の信任を担っていることを表す。愛と自己否定の高潔さによって、彼らは自分たちの周りにいる者たちに、自分たちが真に救い主に従う者たちであることを示すのである。(世界総会公報1900年7月1日)

人は神を最高に愛するように、すなわち能力を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして愛するように、また隣人を自分自身のように愛するように要求されている。人は自分を否定しない限り、これをなすことはできない。キリストは、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言われた(マルコ8:34)。

自己否定とは、感情が支配権を得ようとするときに精神を治めることであり、また非難したりあら捜しの言葉を語ったりする誘惑に抵抗することであり、また 頭の回転が遅くてふるまいが嘆かわしく腹立たしい子供に忍耐することであり、また他の者が義務の持ち場につくことを怠るときにそこにつくことであり、またいつでもどこでもあなたができるときは責任を負うこと、すなわち称賛を得るためではなく、政策のためでもなく、確固とした忠実さをもってなすようにとあなたに働きを与えられた主人のために責任を負うことであり、また自分自身を称賛することができたかもしれないときに口を閉ざして他の者たちが称賛するようにさせることである。自己否定とは、傾向が自分に仕え自分を喜ばせようと導くときに、他の者たちに善を行うことである。あなたの同胞はあなたの努力に何の感謝もせず、またその努力を称賛しないかもしれないが、あなたは努力し続けるべきである。

あなたの受け入れた真理が、あなたにとって堅い原則となったかどうかを、注意深く調べなさい。あなたは祈りの部屋を出るとき、キリストを自分と共にお連れしているだろうか。あなたの宗教は、自分の唇の門守となっているであろうか。あなたの心は同情と愛のうちに自分自身の家族以外の者たちに向かっているであろうか。あなたは他の人々に自分の光が輝き出るように、熱心に聖書の真理をよりはっきりと理解しようと求めているだろうか。あなたは自分の魂に対してこれらの質問に答えることができる。(教会への証4巻521)

すべての改心した魂には、なすべき働きがある。わたしたちは恵みを惜しみなく与えるために、恵みを受けるべきである。わたしたちは輝く明けの明星であられるお方から光が輝き出るようにし、自己否定と自己犠牲の働きにおいて、キリストがご自分の生涯とご品性のうちにわたしたちに与えてくださった模範に従うことによって、光を投じるべきである。(家庭伝道 1896 年8月1日)

反対を予期しなさい

「もしこの世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを、知っておくがよい。もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではない。かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だから、この世はあなたがたを憎むのである。わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう。」(ヨハネ 15:18-20)

神はご自分のみ言葉のうちに神聖な真理を提示してこられた。そして、このお方はわたしたちが自分たちの都合や名声、また世的利益を考慮することなく、それらを受け入れることを求められる。わたしたちの前に教義または義務が提示されるときはいつでも、決定されるべき、きわめて重要な質問は、それは神のみ言葉によって全面的に支持されているであろうか、主はわたしたちにこれを要求しておられるであろうか、である。もしそうなら、どのような十字架が伴っていようとも、わたしたちはためらうことなくそれを受け入れるべきである。

もしわたしたちが神を愛し、このお方の戒めを守るなら、わたしたちはキリストの時とまったく同様に、世が少しでもわたしたちに賛成するなどと期待するには及ばない。……真理は人の教理に相反し、彼らの不義の行いをとがめるので、最も苦い反対をひき起こすのである。大多数は、中にはキリストの名を担う者たちでさえ、このお方の自己否定と十字架を負う模範に従うことを快く思わないのである。そして彼らがこのお方から遠ざかれば遠ざかるほど、彼らは天のことがらと地上のことがらを区別することができないのである。彼らの平安は、神に仕え、すべての罪深い習慣を捨てる民がいるという事実によってかき乱される。神のご要求を踏みにじっている者たちは、このお方に服従する者たちの行動によって、絶え間ない譴責を感じるのである。これが、そのような敵意が神に忠実であるすべての者たちに対して表される理由である。この理由のために、パリサイ人たちはキリストを拒んだのであった。そして、同じ精神はまだ存在しており、さらに時の終わりまで存在し続けるのである。……最も苦く残酷な迫害は、いつも信心の精神と力のない宗教の形式を持つ者たちからもたらされるのである。(ヒ자リカル・スケッチ・オブ・SDA・ミッション 195, 196)

神を自分の友また助け主とする者は、冷淡な無視、虐待、迫害という長い冬も過ごすことができる。キリストが与えてくださる恵みによって、最も苦しい試練の下でも彼は神を信じる信仰と信頼を維持することができる。彼は救い主の模範を思い出し、もしそれによって品性の純真さ、心のへりくだり、イエスを信じる永続的な信頼を自分のものとすることができるなら、苦悩と迫害に耐え抜くことができると感じるのである。クリスチャンの信仰の勝利とは苦しみ、そして強くなること、屈服することによって勝利すること、終日ほふられているが、生きること、十字架を担い、それによって不朽の栄光の冠を勝ち取ることである。(パウロの生涯からのスケッチ300)

現代の真理は新しい迫害をもたらす

「もしわたしがきて彼らに語らなかったならば、彼らは罪を犯さないですんだであろう。しかし今となっては、彼らには、その罪について言いのがれる道がない。わたしを憎む者は、わたしの父をも憎む。」(ヨハネ 15:22, 23)

多くの者たちは、「わたしの父や祖父は良いクリスチャンで、日曜日を守って死にました。彼らは救われるでしょうし、わたしも喜んで危険を冒して、彼らがしたように行います。全世界は、日曜日を守っています。わたしもわたしの他の教会員と同じように休むのです」と言って日曜日を守る言い訳をする。しかしこれらすべての口実は裁ぎにおいて受け入れられるであろうか。否、断じてそうではない。もし彼らの父が、神がこの終わりの時代にご自分の民に送られた光と警告のメッセージを持っていたならば、彼らが率直で神を畏れる人々であれば、神の戒めに従ったことであろう。わたしたちの先祖たちは彼らが一度も受けたことのない光について、または彼らが聞いたことのない警告のメッセージに対しては責任がないのである。それなのに、ただ彼らの習慣と慣習が各世代に伝えられてきたからというだけで、それらを尊重すべきだと思うのであろうか。……

特別な真理が、国々の存在した時の状態に適合されてきた。この世代の人々に対する試金石である現代の真理は、はるか昔の世代の人々に対しては試金石ではなかった。……

わたしたちは自分たちの上に輝いている光に対してのみ、責任を持っている。神の戒めとイエスの信仰がわたしたちを試している。もしわたしたちが忠実で従順であるならば、神はわたしたちを喜ばれ、わたしたちをご自分の選ばれた、神につける民として祝福される。完全な信仰と完全な愛と従順が溢れ、キリストに従う者たちの心のうちで働くとき、彼らは力強い感化力を持つのである。光は彼らから放射し、彼らの周りにある暗闇を払い去るのである。(レピュー・アンド・ヘラルド1897年7月13日)

キリストの真理の友らは、時勢に便乗する世代によっていつも迫害されるのである。彼らは改革の敵によって熱狂者また狂信者と称されるのである。罪をとがめ、正義へと忠告する神のみ言葉の燃えるような真理は、悪事を働く者にとって気に入るようなものではない。キリストのすべての真の弟子は殉教者の精神を持つべきであり、神の恩恵を失うよりは、何でもまたすべてを犠牲にする用意ができていなければならない。……

〔キリスト〕から背を向けることは、無限の真理、愛と正義を拒むことであり、心の扉をすべての天来の啓発に対して閉ざすことであり、暗闇と絶望を招くことである。このお方を受け入れるとは、光と平安と喜びである。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1878 年 2 月 7 日)

歴史は繰り返される

「もし、ほかのだれもがしなかったようなわざを、わたしが彼らの間でしなかったならば、彼らは罪を犯さないですんだであろう。しかし事実、彼らはわたしとわたしの父とを見て、憎んだのである。それは、『彼らは理由なしにわたしを憎んだ』と書いてある彼らの律法の言葉が成就するためである。」(ヨハネ 15:24, 25)

キリストのご生涯は純潔の具現化であった。そしてまさにこの理由のゆえに、このお方は憎まれたのであった。このお方の義は、パリサイ人たちの義とは非常に際立った対照をなしていたので、このお方は彼らにとって絶え間ない非難であった。(サインズ・オブ・ザ・タイムズ1878年2月7日)

キリストがゆえなく憎まれたように、このお方の民も神の戒めに従順であるために憎まれるようになる。もし純潔で、聖にして汚れのないお方、わたしたちの世において善を、しかも善だけをなされたお方がひどい犯罪者として扱われ、死に定められたのなら、このお方の弟子たちも、どんなに彼らの生活が欠点のないもので、また彼らの品性が潔白であっても同様な取り扱いを予期しなければならない。人間の法規や、善と悪の抑制という口実の下でサタンの代理人たちによって作られた律法が高められるであろう。その一方で、神の聖なる戒めはさげすまれ、足の下に踏みにじられるのである。そして、エホバの律法への従順を彼らの忠誠によって証明する者たちは、捕らえられて、神の高く聖なる律法をその基準とはしていない議会の前に連れてこられる覚悟ができていなければならない。

祭司と指導者たちを動かした同じ精神が、カインが兄弟を殺すように動かしたのであった。不従順の子らを従順へと呼びかける者たちの声を沈黙させようと彼らのうちに働くのは、真理からの背教である。そして今日この精神が、神のみ言葉を踏みにじり、このお方の聖なる律法に違反している教会のうちに表されているのである。……

諸教会は世に向かって転向してきた。そして彼らは、世の今の時代に、自分たちがしようと思えば何をするかを示している。もしキリストが今日の世におられるならば、多くの者たちは、このお方の初臨のときにユダヤの国民がこのお方をまったく望まなかったように、このお方をまったく望まないのである。彼らはユダヤ人たちがしたようにするであろう。もし彼らができるなら、彼らはキリストを十字架にかけるであろう。なぜならこのお方は彼らに真理を語られるからである。多くの者は、この時点まで教育されている。魂を彼らの曲がった教えにつまずくようにした指導者と教師たち一預言を理解することができたはずなのに、それらがこの時代に当てはまるかどうか、また自分たち個々人にかかわっているかどうかを調べるために読まず、研究しなかったすべての者たちは、罠にかかり、永遠の損失を受けるのである。彼らは突如として滅ぼされ、それには救済策がないのである。(レビュー・アンド・ヘラルド 1899 年 12 月 26 日)

実際的なキリストの力

「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであるう。あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるから、あかしをするのである。」(ヨハネ 15:26, 27)

キリストは男女に罪なく生きることができること、また彼らの言葉、行動、精神が神へ聖化されることができるということを示すために、人性をお取りになり、世の憎しみを負われた。もしわたしたちがこの力を自分たちの生活において表すなら、完全なクリスチャンになることができる。天の光がたえずわたしたちの上に留まるとき、わたしたちはキリストを代表するのである。キリストを世から区別し、憎しみを呼び起こしたのは、このお方の生活のうちに表された義であった。

わたしたちはこの世の歴史の最後に近づいている。勝ち取るべき天と避けるべき地獄があることをつねに覚えよう。真理への従順によって自分たちの魂を清めることを拒む者が、わたしたちのうちにいる。主はこう言われるという言葉を厳密に固守する者たちはあまりにもはなはだ特殊すぎるということを示すために、彼らは詭弁を持ち出すのである。彼らは純潔と真理と聖潔から、またクリスチャン品性の発達から思いをそらそうとする。しかしそのような魂は問題をめぐってサタンの側に立っているのである。

改心することを拒み、門を通って都に入る権利を拒む者が、神の厳格さと激しさを責めるのであろうか。一人の罪人が天に入ることを許せば、その結果は第二の反逆であり、神は新たな反逆を許すことはおできにならないのである。天の都に入るすべての者たちは、神の恵みを通して聖化されなければならない。彼らの弱点は、真理が彼らの品性の最大の強みとなるような真理との関係へと導きいれられなければならない。真理を守った者たち一それを実践した者たち一だけが門を通って神の都へ入ることができる。

キリストの言葉は各時代のご自分の民のために一世の終わりが臨むわたしたちのために一語られたのである。わたしたちに臨むテストは神の戒めに関するものである。わたしたちが神の性質にあずかる者となるときにのみ、わたしたちは勝利することを学ぶのである。……

あなたの心を残らずすっかり神に捧げるであろうか。このお方はあなたを所望しておられる。このお方はいつでもあなたを受け入れ、あなたが悔い改めて罪を捨てるときにすぐにも許そうとしておられる。あなたは何度も何度も失敗するかもしれないが、あなたが真に悔い改めるなら、何度も何度もこのお方はあなたを許してくださる。そして、このお方は、あなたを愛し、あなたをその血によって洗われたお方を通して、あなたをついに勝ち得て余りある者にしてくださるのである。(説教と会談 1 巻 402-405)

研究 I 神の憐れみの最後の招き



「神の憐れみの最後の招き」

今月より、「神の憐れみの最後の招き」という主題のもとに、み言葉を学んでいきます。

わたしたちが現代の真理を学ぶとき、今は最後のメッセージが伝えられる時だということを知っています。しかし、最後の招き、最後の警告と聞いて、わたしたちは何を考えるでしょうか。同じ言葉を聞いても、どのように考えるかによって、その結果が変わります。それはちょうど箴言 23:7 (英語訳) に、「考えることがその人そのものである」と書いてある通りです。ですから、よく自己吟味してから、この学びに入ることは非常に有益です。

自分にとって最後の警告とは何だろうか―最後になったら聞こえてくる警告、 すなわち新しい警告でしょうか。あるいは、これまで与えられてきた警告が、最 後に繰り返されることを意味しているでしょうか。

今回の主題である最後の招きを final call と言いますが、ある場所でこの言葉をよく耳にします。そうです、空港です。最終案内 (final call) と訳されていますが、つまり、最後の招きということです。もし最終案内がその時初めて聞こえる新しい案内であれば、空港は混乱することでしょう。それは、何度もこれまで繰り返されてきた案内がこれを最後に止む、すなわちその後は戸が閉まることを意味します。

最後の招き

イエスは「人の子の現われるの」も、「ちょうどノアの時のようであろう」と言われました。「すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのよう

であろう」(マタイ 24:37-39)。彼らが気がつかなかったのは、神が彼らに警告されなかったからでしょうか。聖書は 120 年間、神はご自分の僕ノアを通して警告を繰り返しておられたことを明らかにしています。

それでは、ノアの時代の警告の内容は何だったでしょうか。それは、「箱舟に入りなさい」ということでした。人の子の現われる時代、すなわち現代は、「至聖所に入りなさい」という招きです。ノアはこのメッセージをどのように伝えたでしょうか。わたしたちはどのように伝えるでしょうか。ノアの時代の経験が繰り返されます。

「彼らは、警告が発せられる前に行なっていた通りのことをなしつづけて、神の警告をあなどっていることを示した。……そして、今、神のしもべは彼の最後の厳粛な訴えを人々にした。彼は、言葉では表現できない心の苦しさをもって、避難所があるうちに救いを求めるように訴えた」(人類のあけぼの上巻94)。ノアは神に命じられた当初から忠実にこの警告を繰り返し、彼らはこの警告を最初から聞いてきましたが、変わりませんでした。神の警告をあなどるということは、「警告を発せられる前に行っていた通りのことをなしつづける」ことを意味します。

それでは、彼の「最後の厳粛な訴え」は何だったでしょうか。

「あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ」(イザヤ55:6)。「神はこう言われる、『わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞きいれ、救の日にあなたを助けた』。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」(コリント第二6:2)。彼は心の苦しさをもって、主にお会いすることができるうちに、最後まで主の許へ来るよう訴え続けました。

このメッセージを伝えるようにノアを選ばれたのは神でした。現代も同じです。 選ばれた人の資格を見ていきましょう。

第一に、神は次のように言われました、「(ノアが) わたしの前に正しい人であるとわたしは認めたからである」、すなわち、ノアは義と認められた人、義認された人でした(創世記 7:1)。

次に第二の資格として、次のように記されています。「義の宣伝者ノア」(ペテロ第二 2:5)、彼は義の宣伝者でした。

そして第三に、彼は「義を受け継ぐ者」となったとあります(ヘブル11:7)。

神に義と認められた人が、義を宣伝し、伝えた通りに義を受け継ぐ者となることがわかります。現代も同じです。

「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」(マタイ24:14)。

現代は、箱舟に替わって、至聖所に入るようにとのメッセージが伝えられなくてはなりません。入るべき人が入ったなら、その後に水によってではなく、火によって滅びが来ることが預言されています(ペテロ第二 3:5-7)。その後、義を受け継いだノアと共に「義の住む新しい天と新しい地」を受け継ぐのです(ペテロ第二 3:13)。

このメッセージを伝えるために必要な資格をまとめてみましょう。

永遠の福音 (=御国の福音)

資格

- 1.義認された人(人)
- 2.義の宣伝者(メッセージ)
- 3.義を受け継ぐ者(目的地)

三重のメッセージ

資格

- 1. () (人)
- 2. () (メッセージ)
- 3. 義の住む天地(目的地)

最後の警告

「わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、「わたしの民よ。彼 女から離れ去って……」(黙示録 18:1,2,4)。

「そこで、この天使一天から下って来、栄光をもって地を照らし、力強い声でバビロンの罪を知らせる天使一によって象徴されている運動が起こる。この天使のメッセージと関連して、『わたしの民よ。彼女から離れ去れ』という呼びかけが聞かれる。これらの布告は、第三天使のメッセージとともに、地上の住民に与えられる最後の警告なのである」(各時代の大争闘下巻 372)。

「第三天使のメッセージが閉じられると、もはや地の罪深い住民のためのあわれみの嘆願はなされない。神の民はその働きを成し遂げたのである。彼らは『後の雨』と『主のみ前から』来る『慰め』を受けて、自分たちの前にある試みの時に対する準備ができた。天使たちは、天をあちらこちらへと急ぎまわっている。一人の天使が地から戻ってきて、自分の働きが終わったことを告げる。すなわち、最後の試みが世界に臨み、神の戒めに忠実であることを示した者はみな、『生け

る神の印』を受けたのである。その時イエスは天の聖所でのとりなしをやめられる。

イエスはご自分の手をあげて、大声で『事はすでに成った』と仰せになる。そして、イエスが『不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ』と厳粛に宣言されると、天使の全軍はその冠をぬぐ(黙示録 22:11)。どの人の判決も、生か死かに決まった。キリストはご自分の民のために贖いをなさり、彼らの罪を消し去られた。キリストの民の数は満たされた」(各時代の大争闘下巻 385, 386)

大いなる叫び

「信仰によって、ノアはまだ見ていない事がらについて御告げを受け、…… (その家族を救うために) …… (その信仰によって世の罪をさばき、) そして、信仰による義を受け継ぐ者となった」(ヘブル 11:7)。

大いなる叫びとは何でしょうか。大いなる叫びの目的を見ながら、確認しましょう。

「洪水の起こる 120 年前に、主は天使によってみこころをノアに伝え、箱舟を造ることを指示された。ノアは、箱舟を造りながら、神が洪水によって悪人を滅ぼされることを説かなければならなかった。その言葉を信じ、悔い改めと改革によってその事件に備えるものは、許され、救われるのであった。エノクは、洪水について神から示されたことを子孫に語ってきかせた。そして、生きながらえてノアの説教を聞いたメトセラとむすこたちは、箱舟の建造を手伝った」(人類のあけぼの上巻 90)。

ここで、エノクが洪水とそのための準備、すなわち悔い改めと改革の「最初の メッセージ」を伝え、ノアが同じ「最後のメッセージ」を伝えたのでした。

いつも、これがメッセージが伝わる方法です。すなわち、「初めに芽、つぎに穂、 つぎに穂の中に豊かな実」というように成長していきます (マルコ 4:28)。

「あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒行伝 1:8)。

「よくよくあなたがたに言っておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう」(ヨハネ14:12)。

「このことによって、キリストは、弟子たちのわざがキリストのみわざよりももっと崇高な性質のものになると言われたのではなく、もっと広い範囲のものになると言われたのである。主は奇跡を行なうことだけを言われたのではなく、聖霊の

働きのもとに起こるすべてのことを言われたのである」(各時代の希望下巻 147, 148)。このお方のなさるわざ、すなわち、**御国の福音を伝える範囲が広がること**を意味していました。

「大いに呼ばわって声を惜しむな。あなたの声をラッパのようにあげ、わが民 にそのとがを告げ、ヤコブの家にその罪を告げ示せ」(イザヤ 58:1)。

そして、その大いなる叫びは、「わが民」「ヤコブの家」から始まるのでした。「女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たち」(黙示録 12:17)と、「あなたの子らは久しく荒れすたれたる所を興し、あなたは代々やぶれた基を立て、……『破れを繕う者』……、『市街を繕って住むべき所となす者』」(イザヤ 58:12)は「連れ合い」であり(イザヤ 34:16)、同じ人々を指していますが、その「子ら」はイザヤ 58:1 から始まるのです。

それでは、「わが民」と神に呼ばれる人はだれでしょうか。それは明らかに「わが民」として生まれた者ではありません。

「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、・・・・だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によれば異邦人であって、手で行った肉の割礼ある者と称せられる人々からは、無割礼の者と呼ばれており・・・・またその当時は、キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者であった」(エペソ 2:1-12)。

生まれながらの「わが民」はいないのです。

「ところが、あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリスト・イエスにあって」(エペソ 2:13)。

神が、「わが民」としてくださったのでした。そのわが民こそ、ノアの持っていた条件を持つ人々でした。しかし、その民がどうなったでしょうか。

「イスラエルは知らず、わが民は悟らない」(イザヤ1:3)。

「主よ、聞いてください。主よ、ゆるしてください。主よ、み心に留めて、おこなってください。わが神よ、あなたご自身のために、これを延ばさないでください。あなたの町と、あなたの民は、み名をもってとなえられているからです」(ダニエル 9:19)。

「主は言われた、『その子の名をロアンミと名づけよ。あなたがたは、わたしの民ではなく、わたしは、あなたがたの神ではないからである』」(ホセア1:9)。こ

のロアンミは、「わが民ではない」という意味です。

「わたしはわたしのために彼を地にまき、あわれまれぬ者をあわれみ、わたしの民でない者(=ロアンミ)に向かって、『あなたはわたしの民である』と言い、彼は『あなたはわたしの神である』と言う」(ホセア 2:23)。

「わが民」となったのは、実に神のあわれみによるものでした。

しかし、ユダヤ人は、それを忘れて「自分がすぐれている」から神の民になったのだと思ったため、癒すことのできないロアンミになってしまったのです。

「あなたがたは、以前は神の民でなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたことのない者であったが、いまは、あわれみを受けた者となっている」(ペテロ第一2:10)。

そうです、「わが民」とは、「神の憐れみを受けたもの」であることがわかります。

「天から力をさずけられた神のしもべたちは、聖なる献身の念に顔を照り輝かせながら、天来のメッセージを伝えに出て行った。……いたるところで、多くの群衆が『神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言っている声がきかれた」(初代文集 450,451)

自分が憐れみを受けた「わが民」が、「神の憐れみの最後のメッセージ」を伝えるのです。

はっきり注目されて、どんな力もそれを忘れさせたりできないようにするのが、神のご計画でした。

救い主を取り巻くおびただしい群衆に、このお方の奇跡を働く力の証拠がありました。

このお方が視力を回復しておやりになった盲人が道を導いていました。

このお方が舌を動くようにしておやりになった人たちが最も大きな声でホサナと叫んでいました。

このお方が癒された足の不自由な人たちは喜びのために飛び上がり、一番元気よくしゅろの枝を折り取って、このお方の前で振っていました。

やもめとみなしごたちは自分たちに対するイエスさまの憐れみのみわざのためにそのみ名をあがめていました。

み言葉によって清められたらい病人たちは、自分たちの上着を道に広げました。

命を与えるこのお方のみ声によって死からよみがえらされた人たちがそこにいました。

そして体が墓の中でくさっていましたが、今や輝かしい人の力を楽しんでいたラザロが、エルサレムへ向かう救い主に付き添っている群衆と共にいました。

新しい数が群衆に加えられ、彼らはその時の霊感を受けて、丘から丘へ 谷から谷へと反響する叫びに参加しました。

「ダビデの子に、ホサナ。主の御名によってきたる者に、祝福あれ。いと高き所に、ホサナ」(マタイ 21:9)。

多くのパリサイ人たちがこの場面を目撃し、そして不愉快になりました。 彼らは自分たちが人々の支配力を失いつつあるのを感じました。自分たち の権力のかぎりをつくして、彼らをだまらせようと努めましたが、自分たち の脅しと訴えは、熱狂を増大するだけでした。

彼らは人々を治めることができないとわかると、群衆を押し分けてイエスさまのおられるところに行き、そしてこのお方に「先生、あなたの弟子たちをおしかり下さい」と言いました。

彼らはこのような騒ぎは違法であり、そして規則によって許可されないであろうと宣言しました。

イエスさまは「あなたがたに言うが、もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」と言われました(ルカ 19:39, 40)。

この勝利の場面は神さまご自身のお定めになったことでした。これは預言者によって予告されていたことであり、地上のどんな力もこれを止めることはできませんでした。人がそれを妨害したり、損なったりするためにどんなことをしても、神さまの働きはつねに前進するのです。

かぼちゃプリン

■材料

水 20ml 豆乳 600ml

かぼちゃ 3 センチ角

バニラエッセンス 2滴

アガー 大さじ3

粗糖 70g

■作り方

- 1. かぼちゃの皮をむき、ゆがいて裏ごしにします。
- 2. 裏ごししたかぼちゃと水を鍋に入れ、煮たたせたところに豆乳を加えます。
- 3. 温まったら一旦火を止め、そこへアガーと砂糖を混ぜた物を入れよく混ぜ、一煮たちさせます。
- 4. そこへバニラエッセンスを加え、容器に入れて冷まします。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校:9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教:11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究:14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先:〒350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱13号「福音の宝」係 是非お申し込み下さい。



【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよ みもの。



【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全 に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

第26話 エルサレム入城(1)

イエスは過越の祭(すぎこしのまつり)に参加されるためにエルサレムに近づいておられました。このお方は、この大きな年ごとの祭りに上っていく群衆に取り囲まれていました。

イエスのご命令で弟子の二人は、このお方がエルサレムへ乗っていくためのロバの子を連れてきました。彼らはその上に自分たちの衣服を広げて、自分たちの主をその上にお乗せしました。

このお方が座られるとすぐに、勝利の大きな叫びが空気をつんざきました。 群衆はこのお方をメシヤ、自分たちの王と歓呼(かんこ) しました。 500 年以上も前に、預言者がこの光景を予告していました。

「シオンの娘よ、大いに喜べ、……見よ、あなたの王はあなたのところに来る。……柔和であって、ロバに乗る。すなわちロバの子である子馬に乗る」(ゼカリヤ 9:9)。

群衆は急速にふくれあがり、みなその中で喜び、興奮していました。彼らはこのお方に高価な贈り物をささげることはできませんでしたが、自分たちの上着をしきものとして、このお方の道に広げました。

彼らはオリブやしゅろの美しい枝を折り取って、道にふりまきました。 自分たちはキリストがエルサレムでダビデの王座を得るために付き添って いるのだと考えていました。

救い主はこれまでご自分の弟子たちにご自分の王位の栄誉を示されるの をゆるされたことはありませんでした。しかし、このとき特別にこのお方



はご自分を贖い主としてこの世にあらわすことを望まれました。

神のみ子はまさに罪びとのために 犠牲になろうとしておられました。後 に続くすべての時代において、このお 方の教会は、その死を熟考と研究の 主題としなくてはなりません。ですか ら、今、すべての人々の目がこのお方 に向けられるべきなのでした。

このような場面の後に、このお方の試練と十字架の苦しみを世からかくしておくことは決してできませんでした。救い主の生涯の最後の日々における一つ一つのできごとが非常に